
チートをこえたチート達

Syura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートをこえたチート達

【Nコード】

N4125T

【作者名】

Syura

【あらすじ】

いきなり異世界に飛ばされてチート能力を手に入れた主人公
何でもありの力とおなじくチートの仲間達と暴れまくる！！・・・
予定

かなり展開早いですよ！！

第一話 適當すぎる神（前書き）

初投稿作品です

かなり展開早いですよ

第一話 適當すぎる神

・・・なにここ

俺は今変な空間にいる
浮いてるような、
落ちてるような、
とんでるような・・・

おkわかった

よくある異世界物の始まり方だな

・・・とゆうことは・・・

なに？

俺異世界に飛ばされんの？

「そのとおり!！」

・・・聞かなかつた事にしよう「おい、無視すんなこら」

・・・聞ーこーえーな「無視すんなつってんだろ!！」（ガスッ
!!!）「ゴフッ!!!」

「・・・ヤベツ、やりすぎた」

「ですむかつ!!」

「あつ、生きてた」

「死んでたまるかー!!」

「ですよねえ」

「ですよねじゃねえ!!いきなり殴ってんじゃねえよ!!死ぬかと思っただわ!!」

「まあまあ、生きてんだからいいじゃん、あんまり怒ると幸せが逃げ「黙れ!!」「ハイハイ」

「で、何で俺が異世界に飛ばされんだ？」

「あ、つつこまないのね」

「いちいちつつこんでたら身が持たないからな」

「何という悟りw」

「で、何でとばされるんだ？」

「暇つぶし(笑)」

「はあ・・・」

「ため息ついてると幸」「もついい」「しけてんなあ〜」

「何でとばされるかはわかった、で、あんたは？」

「ご想像にお任せしま」「いいから答える」「ユーモアのわかんない奴だなあ」

異世界に飛ばされるって時に、ユーモアなんてしらねえっつの

「まあまあ気楽にいこうぜ？」

「D A M A R E！」

「ちっ……」

「今舌打ちしたよね！？」

「へいへい舌打ちしましたよ〜」
激しく殴りてえ

「え〜と、とりあえず自己紹介、知ってると思うが、神だ」

・・・やっぱりか

神

「そんな顔してると幸s」「そんなにO H A N A S Iしたいのか？」
「へいへい」

っていうかなんかこのくだり多くねえか？

神

「まあそんなかつかすんなよ・・・幸せが逃げてくぜ？」

守

「誰のせいだと思ってるんだ？」

神

「俺」

このやるつ…

神

「自覚はしているが後悔はしてな」「しろ」「ハイハイ」

何でこいつはこうなんだ？

神

「今回はおまえにプレゼントがあるー！」

何っ!？

神

「・・・はい終了」

はい？

神

「今のでお前にスキルを渡した 後で説明書送るから読め」

何ですと〜!?!?

神

「じゃ行つてらっしゃい」

は?

(ギョーンッ!)(落下スピードUp)
Nooooooooo!!!

ピタッ(地面すれすれでストップ)

守

「し、死ぬかと思つた・・・」

あの野郎いつか絶対にぶちのめす?
にしても腹へつたな・・・
なんか食いもんは無いかなつと(ゴソゴソ)
ん?

何かあつた

(この世界とあなたのスキルの説明書 作・神)

説明書GET!!

じゃなくて、何でポケットに入れてんだよ!?
送るつていつときながらポケットの中かよ!?
まあいいや
えつとなになに

(この世界は、モンスターがいて、剣とか、槍とか、魔法などを使えないと死ぬのでとりあえず戦闘に使えるスキルを渡した、

まず一つ目のスキルは「魔力ブースト」その名のとおり魔力を底上げするスキルだ。

二つ目が「属性ブースト」、この世界には八つの属性があり、このスキルは、八つ中六つは使えなくなるが、残りの二つが、想像力でいくらかでも強化できるというものだ。

八つの属性は、炎、氷、地、風、水、雷、光、闇がある。

好きなものを選び。）

適当だなあ・・・

第一話 適當すぎる神（後書き）

一話目はどうだったでしょうか？

一応書き溜めしてますけど不定期更新です

作者はコミュニケーションが苦手だしアホなので温かい目で見てください

第二話 まあ色々と説明(前書き)

はい二話目です

・・・やべえ他に書くことねえ

だってこれと違って特徴ないですしね？

あ、でもこれ書いてるじゃん…

第二話 まあ色々と説明

属性選べって簡単に言うけど　その他六つ使えなくなるんだぞ!?

(なお次のページに各属性の大まかな役割を書いておく)

・・・とりあえず読むか

(「炎」熱気を操ることができる属性

熱気を操ることにより空気中に炎を作り出したりすることができる

「氷」冷気を操ることができる属性

冷気を操ることにより空気中の微量な水分から氷を作ることができる

「地」土や鉱物、植物を操ることができる属性

水があれば一瞬で植物を育てることができる

「風」空気を操ることができる属性

空気を圧縮し飛ばすことにより斬撃を飛ばすことができる

「水」

水を操ることができる属性

どこからともなく水を作り出すことが可能

「雷」電気を操ることができる属性

電気を作ったり電気を使って磁力を作ることができる

「光」回復やステータス変化をすることができる属性

補助系を操ることができる特殊な属性

「闇」闇を操ることができる属性
闇を作ったり固形物にしたりちよっとした異空間を作る可能)

守

「回復や補助があると便利だし 異空間を作れば収納スペースに困らなそうだしなあ

うん、決定

俺が使うのは光と闇だ！」

次の瞬間俺の体は光に包まれた……(フツ……)
俺の体を包んでた光は消えた……

(ピリリリリリ！ ピリリリリリ！)

！

……携帯の着信音？

(ゴソゴソ)

あっ

ポケットに入ってた

とりあえずでよう

神

『携帯ぐらい早くでろ！！』

守

「ポケットに携帯入ってるなんて聞いてねえよ！！」

神

『あれ？

「そうだったけ？」

「バカなの？死ぬの？」

守

「その位覚えとけ！！」

「第一元の世界で携帯なんて持ってねえよ！！」

「はいそこ遅れてるとか言わない」

神

「マジで!?!」

「遅れてるなあ・・・(てっぺてっぺてっぺてっぺん？あっちゃった！
フラ　っちになった!」

守

「たまごっ　!?!」

「今時フ　ワっちがでてきてその音するたまご　ちやっぺんの!?!
おまえにだけは遅れてるって言われたく無いわ!?!
第一この携帯も古い機種じゃねえか!?!」

「何でこの機種なんだよ！」

神

「えっ!?!」

「マジで!?!」

「あっこのチラシ3年前のだ」

守

「チラシ見てこれ選んだの!?!」

神

『うん』

守

「はあ」

こいつの適当加減には本当にあきれ

神

『ため息ついてると「幸せが逃げてくぜ？、だろ？」セリフとるなよお』

守

「で、何のようだ？」

神

『じゃ本題に入るぞ？
まず一つ目はお前に渡したアイテムの特殊能力の説明』

守

「特殊能力？」

便利なものだとうれしいんだが

神

『そつ、特殊能力
おまえの服、渡した説明書、この携帯のほかにも後々追加する予定だ』

守

「お前のことだからどうせチートな能力なんだろう？」

神

『そのとおり』

まず衣服には魔法、物理ダメージを軽減する能力』

守

「もうその時点でチートじゃねえか」

神

『あとポケットは某猫型ロボットのポケットと同じような能力を持つてる』

守

「ドラえもん？」

某青狸か？

神

『で説明書は臨時更新される
そして携帯には・・・』

説明書の説明短っ！

にしても携帯はためるってことはさらにチートな能力かな？

神

『その能力は・・・』

俺からのメールと電話を受け付ける以外の機能がないということだ

「!!」

守

「ふざけんなー!!
劣化してんじゃねえか!!」

お前は何がしたいんだあー!!

神

『ま、それだけだ、じゃな』

守

「おっ、おい待て、ってもう切れてる・・・」

ぜってえいつかぶっ飛ばす?とりあえず手に入れたスキル試してみ
るか・・・
んじゃまず

守

「『ドル』!!」

・・・なあにこれ?

ド マを唱えたら直径二センチぐらいの黒い固まりができた

守

「想像よりかなり小さい・・・
もしかして俺才能ないのかな?」

とりあえず撃ってみよう

ホイッとな

(ふよふよ)

やっぱしょべえ・・・
へこむわあ・・・

(ちよん)

(ズオオオオ!!)

(。°。°)ポカーン

何ですかこれ!?

何か木に当たった瞬間巨大化しましたよ!?
そして作者が顔文字使いましたよ!?

「おい大丈夫か!?

どっから飛んできた、今の!?

やべっ!!

誰かに当たったかな?

「あそこだ!

あそこにいたぞ!!」

やべっ

見つかった

・・・

・・・

・・・

現在に至る

長っ!!!

回想長っ!!!

とりあえず

Help me!

(ちゅどーん)

「ぐわー!!」

何?

なにが起こった?

みなさん吹っ飛びましたよ?

第二話 まあ色々と説明（後書き）

はいどうでしたか？

ついでに今んところ何人がキャラ出来てます

まあそのうち出てきますよ

楽しみにしてください

って言っても今日中に書くつもりなんですけど……

第三話 助けてくれたと思ったら・・・(前書き)

実は話分けてたのをくっつけてるんですよだから時々話みたいで
ないのに話みたいだとか書いてると思います
直すのは溜まってるの投稿してからにします

第三話 助けてくれたと思ったら・・・

「大丈夫？すごい音がしたけど」

もやの中から声がする・・・
女の子かな？

「こんなとこに居たら危ないよ？この辺は盗賊のアジトがあるんだから」

もやの中からでてきたのは俺と同じ年ぐらいの女の子だった

「とにかくここは危ないから近くの村まで送るよ」

守

「助けてくださってありがとうございます
ところでここは何処ですか？」

「？」

おかしいことを言うわねえ

ここはガルダ村近くの森の中よ
この近くの住民は盗賊やモンスターがでるから近づくかないんだけど
すごい音がしたからね、で来てみたら君がいたってわけ」

守

「そっなんですか」

「でも、近くの住民ならみんな知ってるはずなんだけど、あんた冒険者かなんか？」

守

「まあそんなところです」

「でも冒険するなら魔法とか剣術とか覚えた方が良いわよ？ さっきみたいに連携とって大技出してくる奴もいるから」

守

「あっ

さっきの俺です」

「……はあ！？」

さっきのはあんたがやったってゆうの！？」

守

「まあそうですけど……」

「でもさっきのS級は行ってたわよ！？
会得しようと思ったら一つの属性だけを何年も鍛えなきゃ使えない
ような魔法よ！？」

そんなにすごい魔法だったんだ？
確かにすごかったけど……

「……あんた

あたしとパーティー組みなさい」

は？

視点変更、カリナ

すごい音がしてきてみたんだけど…

守

「パーティーって何ですか？」

カリナ

「そんなことも知らないの？」

パーティーってのは評議会に提出して一緒にクエストとかを受けた
り旅したりするグループの事よ」

守

「評議会って何ですか？」

カリナ

「あんたほんとに冒険者！？」

冒険者なら知ってて当然の事よ！？」

ほんとしらなすぎじゃない？

守

「なにぶんなりたてでねえ」

カリナ

「いやいや冒険者だって評議会に認めてもらって初めて国と国を行
き来できるのよ？」

こんなの三歳時でも知ってるわよ」

守

「そうなの？
俺田舎出身だから全然しらねえわ」

うそっばい…

カリナ

「どこの村？」

この国の町や村なら一通り通ったからわかると思うわ

守

「いや村ってゆうか

集落みたいな感じで一つの場所に収まってないんだよ」

そんな物聞いたこともないわ

カリナ

「そんなのこの国で聞いたことないんだけど」

守

「いや国の端っこの方だから

あんまり知られてないのかもしれない」

カリナ

「この国で知らないところ無いぐらいこの国にいるんだけど？狭いから数ヶ月で全体を回れたわ」

守

「いやちょっと海の上で」

海？

カリナ

「この国内陸よ？」

嘘ついてんじゃないの？」

守

「湖かな？」

自分の故郷のことわからないの？

カリナ

「湖なんてこの国に無いわよ」

絶対裏があるわ…

視点変更、守

やあみんな！

この小説の主人公、綾野 守だよ！

え？

メタ発言？自重？

ナンデスカ？ソレハ？

カリナ

「ちょっと答えなさいよ！！」

はい！、僕は今助けしてくれた少女に質問責めにあっています！

守

「じゃあ、川の上で」

カリナ

「じゃあってなによ!？」

早くほんとのことを言いなさい!！」

守

「言う

言うから首絞めないで……」

カリナ

「あら？」

無意識のうちに絞めてたわ」

危ない人だ……

守

「死ぬかと思いましたよ?」

カリナ

「ごめんなさいね

だってあんたがほんとの事なかなか言わないんだもん」

守

「だからって首絞めんなよ……」

カリナ

「何か言った?」

守

「何にも言ってますん!！」

「そう？

ならいいわ」

今殺気が凄かったんだけど・・・

カリナ

「ところで

早くほんとのこと言ってくれる？

怒らないし笑わないから」

守

「本当に怒らない？」

カリナ

「怒らない」

守

「じゃあ・・・」

俺は今までのことをはなした

大して話すこと無いけど・・・

で話してみたら・・・

(フルフルフルフル・・・)

やべえ！！

怒ってる！？

そりゃ、ほんとの事話すって言って異世界からとばされたなんて言
ったら怒るけど、そんなにふるえるほど怒らなくても！！

カリナ

「ま・・・」

ま？

カリナ

「まさかあたしと同じ境遇の奴がいるとわね・・・」

はい？

守

「今なんと？」

カリナ

「だからあたしと同じように異世界にとばされてる奴がいると思わなかつたって言うてるの！-！」

うおっ！

そんなに怒鳴らなくても・・・

ってゆうか

あいつ俺以外も異世界にとばしてたのかよ

とりあえずその後お互いの自己紹介と愚痴を言い合った
名前はカリナらしい

第三話 助けてくれたと思ったら・・・（後書き）

はい新キャラ登場です

かなり不安定な子なんですよねえ

まあ作者がバカだからなんですけど・・・

第四話 なんか、うん疲れた(前書き)

さてさて今回の守くんは・・・

第四話　なんか、うん疲れた

一通り自己紹介を終わらせた俺たちはこの後どうするか話し合った。
結果

「ギルドに行くことになりました」

「誰に話してんのよ」

「まあまあそれはおいといて」

「何よ」

「ギルドって何だ？」

「はあ・・・」

ギルドっていうのは評議会の支部みたいなところよ
そこで冒険者登録したり、昇級試験を受けるのよ」

「なるほど」

「だからそこであなたの冒険者登録とあたしの昇級試験をしに行く
のよ」

「はい先生」

「はい守君」

「昇級試験って何のですか？」

「冒険者にはランクがあつて下から、G、F、E、D、C、B、A、S、SS、SSSの十ランクあつて冒険者登録するときはGランクからの」

「なるほどな」

「で、昇級試験を受けてランクを上げていくの、自信があるならAランクまで飛び級できるわよ？まあなかなかクリアできる奴がいないんだけど・・・」

「だけど？」

「あんたなら大丈夫よ！！」

「それは要するに登録した後すぐにAランク試験を受けると言うてるのか？」

「そうよ」

「むりじゃあー！！」

「あんたなら大丈夫！！」

「どこからその自信が！？」

この世界の知識をみっちり叩き込まれながら俺達は近くの村にあるギルドに向かったそして・・・
「ギルド到着！！」

「テンション高いわね」

「だって魔法の使い方ほとんど知らないのにドラゴンやらなんやらかんやら出てくるんだもん！」

「何か問題ある？」

「あるに決まってるんだろ！！
暴発して吹っ飛んだからね！？」

「力の制御をしないからよ」

「過去一回の試しうちしかしてない物をどうやって制御しろってんだよ！？」

「ノリ」

「ノリで出来るかああ！！」

「私はできたわよ？」

「そりゃあんたは魔法のある世界から来たからいいけど俺は魔法もくそもない世界からきたんだよ！！
出来るわけねえだろ！！」

「魔法はイメージで操るのよ
威力も形もイメージで出来るのよ」

「初耳じゃあ！！」

「あれに聞かなかった？」

「あれが言つと思ひか？」

「思わない」

「じゃ、あいつ出すなやあ！..！」

「いちいちうるさいわねえ」

「誰がうるさくさせてんだよ！..！」

「あたし」

「自覚有りかよ！..！」

「はいはいもういいかしら？」

「このやろっつ」

「手続きしに行くわよ」

「無視しやがった」

「早くこっちきなさい」

「もうめきじめよっつ」

「じゃこいつの登録お願いします」

「はいわかりました」

「じゃあお名前を」

「あ、守です」

「マメルさんですね
でわここに性別と年齢、得意な魔法の属性を」

「これでいいですか？」

「はい」

「これで登録完了です」

「ありがとうございます」

「ん？」

「終わったの
じゃああたしの昇級試験を」

「はいわかりました
じゃあランクを」

「Aランクで」

「はいわかりました」

「ちょっと待て!!」

「何よ？」

「お前自分も受かってない試験受けさせようとしてたのか!?!」
「そうよ?」

何か問題ある？」

「大有りだ!!」

自分が受けて簡単だったならいいけどそうでもないのにおけさせようなんざ「文句ある？」（ボツ!!）有りません!!」

「じゃこいつもよろしくね」

「はい

かしこまりました」

「かしこまられました」

「いつとくけど

逃げても無駄よ？

地獄の果てまで追いかけて

骨が炭になるまで燃やして

永久に溶けない氷で固めて

地下10?まで掘って埋めて

その辺の区域を立ち入り禁止にしてあげるからね（ニコッ）「

（笑顔だけど超怖ええ）

「じゃあカリナさんからお願ひします」

こうして（強制的に）Aランク試験を受けることになった

第四話　なんか、うん疲れた（後書き）

というわけで頑張れ守!!

第五話 抵抗しないんじゃない！！できないんだ！！（前書き）

さてさて例のやつは執行されるのかな？

第五話 抵抗しないんじゃない！！できないんだ！！

「『ソルレーザー』！！」

(ジュンツ！！)

(。。。) ポカーン

「何じゃそりゃー！！？」

「お疲れさまでした」

「はい次あんたよ」

「てめえなんて技出すんだよ！？
作者が思わず顔文字使ったぞ！？」

「メタ発言乙WW」

「乙WWじゃねえよ！！」

「一瞬で2000の熱でも形を1？も変えない鱗を持つ上級サラマ
ンダーを消し炭にするってどういう事！？」

「炎の魔法で熱をためて圧縮して撃っただけよ？」

「すみませんスタッフさん

あの魔法はそんなにあっさりしたものですか？」

「十年炎属性だけを訓練しても手に入れられる人はごく少数です」

「ほらみる何を当たり前みたいな感じではなしてんだよ!!」

「でもあなたの魔法は二十年はかかるわよ?」

「え!？」

マジ!？」

「大マジよ

あたしも1ヶ月練習したんだから」

「短っ!？」

「あんた試し撃ちで半径10mのクレーター作ってたじゃない」

「本当ですか!？」

「あん時は力加減できなかつたんだよ!!」

「何となくであれなら本気出したらホーリーワイバーンを一瞬で倒せると思っつわよ?」

「これじゃあチート小説になっちゃう!!」

「もうすでになってる」わかってらあー!!」「ちよっ、最後まで言わせて!？」

「次俺ですよ

早く行きましょっ」

「ちよっ!？」

無視!？」

「こちらです」

「スタッフ!？」

後で守に八つ当たりしてやる……」

(ゾクツ)

「？」

どうされました？」

「いや

ちよつと寒気が……」

「風邪ですか？」

「たぶん大丈夫だと思います

……嫌な予感するけど……(ぼそっ)「

「そうですね？」

じゃあ試験の説明を」

「お願いします」

「ルールは簡単次々出てくる敵を倒すだけです」

「なるほど」

「ただし」

「ただし？」

「出てくる敵は毎回違います」

「マジで!？」

「マジです」

「ついでにさっきは下級から上級のドラゴンでしたけど」

「けど？」

「一体だけ強力な奴が出るときもあります」

「例えば？」

「神龍」

「神龍!？」

「ホーリーワイバーンの十倍強って言われてるあの!？」

「よく知ってますねえ」

「道中みっちり教え込まれたからな!！」

「涙がでてますよ？」

「涙じゃないやい!！」

「目から汗がでただけだ!！」

「早く入ってくださいこっちも忙しいんですから」

「ヒドッ!?!」

「本当に早くしてくれませんか?

彼氏と会う約束有るんですよ」

「それ本音!?!」

「ほら早く入ってくださいよ!?!」

「ちよっ!?!」

押さないで!?!」

入るから!?!」

こうして(強制的に)試験は開始した
この頃強制多くない!?!?
そして

「Nooooooooo!?!」

「早く戦いなさい!?!」

「ホーリーワイバーン2体と神龍とか無理じゃあああ!?!」

「早くしてください彼氏との待ち合わせまで30分きってるんです」

「俺の発言無視!?!」

「あんたが本気出せばホーリーワイバーン2体なんかすぐよ」

「神龍いるからね!？」

「あ、完全に忘れてた」

「おいしい!!」

神龍落ち込んでるよ!？」

今の言葉で落ち込んでるよ!？」

(ギユアアアア!!) ってギャー!!
怒ってるよ!？」

神龍完全に怒ってるよ!？」

「うっせえ、いいから早くしろ」

「さつきからひでえ!!」

しかもスタッフさんも敬語じゃなくなってる!？」

「何言ってるやがるのですか？」

私はちゃんと敬語を使ってますよ？

耳腐ってるやがるんじゃないですか？」

「それ敬語!？」

「黙りなさい」

「もういい諦めた・・・」

こうなったら・・・

俺の考えた中で最強の魔法をぶっ放してやる!!
くらえ!!

『ブラックホール』!!」

第五話 抵抗しないんじゃない!!できないんだ!!(後書き)

守、乙!!

今度一矢報いる機会やるからな

頑張れ守!!

第六話 天才学者と観察結果（前書き）

また新キャラですよ

第六話 天才学者と観察結果

「ちよっ!!」

痛い!!

足の上に座ってる!!」

「あ、ごめん

でも痛がりすぎじゃない?」

「足、骨折しとるんじゃない!!」

「あ、そういえばそうだったわね」

「折った張本人が何を言う!!」

「か弱い女の子がちよつと曲げようとしただけじゃない」

「二人がかりで曲がっちゃいけない方向に曲げられたら誰だって折れるわ!!」

「まあそれはおいといて」

「おいてんじゃないよ」

「はい、お土産」

「お、気が利くじゃねえか!」

「中身は玄米100kg」

「なにに使えと!?
ってゆうかよく入ったな!?!?」

「スタッフさんの魔法で圧縮してもらったの」

「じゃねえよ!!
つかそんな魔法あるんだ」

「地の魔法よ
『ペダ』っていの」

「『ペン』!?!?
この世界にもあるのか・・・」

「?、なんか言った?」

「いや、何でもな(ドゥゴー!!--:(Nooooooooo!!--:」

「あら
大丈夫?」

「なわけあるか!!--:」

「大丈夫そうね」

「いたたた・・・
なんやここ?」

「人~~~~!?!?」

「ん？」

おっ、人や人!!

いや〜一時はどうなるかと思ったけど人がおってよかったわ〜

「おっおまえ誰だよ!!」

「ん？」

わい？

わいは最年少で博士号を取った学野 遊馬 (まなびや ゆづま) ちゃん
よろしゅうに「

ん？

博士号？

「博士号？」

何それ食べれるの？」

「博士号なんか食えるか!!」

「え？」

食べられないの？」

「無理じゃアホ!!」

「アホとはなによ!!」

「やるんか!!」

「やってやるうじじゃない」

「ちよ、やめて〜〜!!」

「病院では静かに!!」

「ん？」

「ここ病院なん？」

「見りゃわかんだろ」

「あ、ほんまや

包帯巻いてる」

「そしておまえはその包帯巻いてる俺に突っ込んできたんだよ」

「そうなん？」

「ごめんな？」

「ああ、もういいよそれよりお前も飛ばされたのか？」

「え？もしかして君らも？」

「そうだよ」

「この世界に博士号何てねえよ」

「そうなん？」

「じゃ化学もないん？」

「試してみたけど一応ある」

「ただしこの世界では魔法が中心だ」

「そうなんや・・・
なんや残念やわあ・・・」

「まあそう落ち込むな」

「ところであんさんらはどちらさんで？」

「ああ自己紹介がまだだったな」そのあとまた自己紹介と愚痴を言い合った

「Aランク試験合格おめでとう!!」

「ありがとう!」

「にしてもあんた来て2日しかたつてないのによくホーリーワイバーンなんて倒せたわね」

「どんなもんでも一定の強さで叩いたら壊れる場所があるからなそこをねろたんや」

「いやいや2日で魔法をあそこまでコントロールするのは誰でもできることじゃねえよ」

「あ、そや!」

三人の魔法の属性の特徴調べてみたらおもしろいことがわかってん!」

「何?」

「えーとまず、炎の魔法は氷の魔法と組み合わせることができるん

「やー!」

「!、それ本当!?!」

「ほんまやで

しかも他の魔法とくらべもんにならんほどに威力があんねん」

「どういう原理でそうなってんだ?」

「もともと熱気と冷気を操る魔法やったからな熱いのと冷たいのが
ほぼ同時にくるから反応しきれへんねん」

「なるほどな」

「わかるの?」

「さっぱりわからん」

「(ズコッ!!)」

「ん?どうした?」

「あんだ・・・
バカ?」

「なぜに?」

「「もういい」

「え!?!」

なに!?

俺なんか悪い事した!?

「まあそれはおいといて」

「ああまた無視された・・・」

「闇の魔法は固形物にしたり出来るみたいやけど基本的に『ドレイ
ン』の属性持つてるみたいやわ」

「例えば?」

「闇で剣を作った場合だしての間常に剣に魔力を吸われ続ける」

「魔力がゼロになったら?」

「死ぬ」

「死ぬ!?!」

「でも作るときに吸い取られた魔力を返してもらえるように作れば
いいよ」

「ああよかった」

「あと光の魔法は・・・」

「光は?」

「次の話で!!」

「メタ発言キターーーーーー」
。
。
。
。」

第六話 天才学者と観察結果（後書き）

次回は番外編です

番外編 その一（前書き）

作者暴走！！

番外編 その一

作者

「番外編キターーーーー！！！」

守

「テンション高いな」

作者

「いや〜実はほかの小説見て一回やってみたかったんだよ」

守

「で、今回やることは？」

作者

「よくぞ聞いてくれた！！」

その名も・・・」

守

「その名も？」

作者

「色々もやもや消しちまえコーナー！！」

守

「例えば？」

作者

「魔法のよくわかる解説とか」

守

「なるほどな」

作者

「ついでに今回から台詞の書き方こんな感じだからね」

守

「途中から書き方変えんのかよ!」

作者

「いや分かりやすいかなあ」と

守

「他の小説がやってて読みやすかったのか？」

作者

「ぶっちゃけそんな感じ」

守

「パクリ？」

作者

「違い!!」

「パクリ場合はしっかりと行ってからにするわ!!」

守

「ところで俺以外のキャラは出さないのか？」

作者

「出してもいいけど100%君が痛い目みるよ?」

守

「やっぱ呼ばなくていい」

作者

「だろ?」

「じゃあ魔法の解説やるか」

魔法は術者のイメージによって形が変わる

魔法の大きさや威力は術者のイメージと使用した魔力によって変わる
守の最初の魔法は守が心のどこかでイメージしたからである
なお魔法は自分で作ることもできる
よって殆どの魔法が名を持っていない

作者

「こんなもんかな?」

守

「イメージと使用した魔力によって変わるってことは要するに俺達
なら殆ど何でもありってことじゃね?」

作者

「そつだよ?」

君達なら無理だとか思わなけりゃかなり強いよ?」

守

「まさにチートじゃねえか・・・」

作者

「今更だな」

守

「ところで他に言うことないのか？」

作者

「切り替え早いな！

そう言えば魔法の事です書き忘れてる事が

守

「何？」

作者

「言っちゃったらネタバレになると思う」

守

「もうすでになってると思う」

作者

「マジで！？」

守

「まあたぶんだけど」

作者

「じゃ大丈夫」

守

「もうちょい気にした方がいいんじゃないかね？」

作者

「気にしたら負けだ
ところで字数稼ぎのためにも何かほかのことやるつかと思うんだけど
何かいいアイデアある？」

????

「守さんを男の娘にするのがいいと思います!!」

守

「てめえ誰だ!？」

いきなり出てきて男の娘ってどういうことだ!？」

作者

「ああ、この子は即興ゲストA子ちゃんだついでに設定は13歳の
女の子

いい働きをしたら本編にもちゃんとした設定付きで出してやる予定
だ」

A子

「よろしくです!!」

守

「ああよろしく」

作者

「んじゃま早速」

A子

「お着替えタイムですね」

守

「マジでやんのかよー!!!?!」

作者

「拒否権なしだ

自己紹介するまでカリナも女だと思ってた位の女顔だから安心しろ」

守

「安心出来ねえ〜!!!」

A子

「問答無用です

覚悟してください」

守

「Nooooooooo!!」

〜着替え中しばらくお待ちください〜

作者

「完成!」

A子

「早く見たいです」

作者

「ついでに強制的に着替えさせました(笑)

それでは除幕!!」

守

「うう、恥ずかしい」

作者

「すげえな・・・」

俺描写下手だけどがんばってみるわ」

まず恥ずかしそうに赤らめた顔はさながらてんによのようだった
ぱっちり開いて涙ぐんでる目はきらきらと輝いていてみるものを魅
了する

鼻はすつと通っていてきれいな形だ

黒のロングストレートは黒い目と合っている

ただ問題なのは・・・

作者

「俺じゃ描写しきれねえ事だ・・・」

A子

「守ちゃん・・・」

おっ持ち帰り・・・（バタンツ）」

作者

「A子倒れるのはまだ早いぞ!!」

まだ撮影会が残ってるじゃないか!!」

A子

「はっ（ガバツ）そうでした!!」

じゃあその黒のロングスカートの端をもって小さくお辞儀して下さい!!」

守

「嫌だ!絶対嫌だ!!」

死んでもしねえ!!」

作者

「作者権限発動!!」

『マリオネット』!!」

守

「なっ!？」

体が勝手に!？」

作者

「作者に逆らえると思うなよ主人公

さあ早いとこ100枚ぐらい撮っちまおうぜ!!」

A子

「イエッサー!!大佐!!」

(パシャパシャパシャパシャっ!!)

守

(ああ死にたい・・・)

作者

「さて!

撮影会も終わったところでA子くん!!」

A子

「はいっ!」

作者

「君をレギュラーに昇格する!!」

A子

「それってもしかして・・・」

作者

「そつだ!!」

存分に守をいじってくれ!!」

A子

「ありがとうございます!!」

その頃守は

守

「生まれ変わるなら虫になりたい・・・

いや、魚もいいな・・・」

色々と落ち込んでるのですた

番外編 その一（後書き）

守とA子は記憶を消しました
本編では無かったことになってます

番外編 その二（前書き）

この話はただの前書きとリア友をしっかりとかけるか試したもので
す

番外編 その二

作者

「えーっと

守ちよつといい?」

守

「なんだよ?」

作者

「実はこの後……に……で……って……のはどうかと思って
るんだけど、どう?」

守

「お前ちゃんとやれんの?」

作者

「まあ、頑張れば」

守

「お前がちゃんとやれてるのみたことねえよ」

作者

「でも他にネタ思い付かねえ」

守

「貧弱な脳みそだな」

作者

「リアルのび太と呼ぶがよい」

守

「いや威張れねえから」

作者

「それはともかくさっきのどつ?」

守

「あいつらどうすんだよ?」

お前リア友とも出す約束してんだろ?」

作者

「いや、あいつならむしろその状況で出した方が喜ぶと思う」

守

「かもしれねえけどいいのか?」

書き溜めしてたやつ既にすっぱかしてんだぞ?」

作者

「あいつ等なら許してくれるさ!」

守

「はあ、まあいいや」

めんどいし」

作者

「おkまかしとけ」

ただし魔法使えなくするからな?」

守

「まあ、不要だしな」

作者

「じゃ決定ね

それじゃ発表します

次の話の内容は・・・」

守

「?どうした?

早く言えよ」

作者

「いやネタバレかなあと・・・」

守

「はあ、じゃあこれどうだ?

次の話のサブタイで予想してもらおうの」

作者

「あ!それいいね!

じゃ今度こそ発表します!

次のサブタイは・・・」

『クールなメカニックとうざい藻』

作者

「です!!」

守

「これでわかるやついたら神だな」

作者

「なぜ？」

守

「だってそのメカニク出てくるやつのネタやってねえし藻ってお前のリア友じゃん」

作者

「あれ？そうだったけ？」

「じゃ、も一つヒント」

例のメカニク

「俺は最後まであきらめない！！」

俺のターーン！！」

守

「絶対わかるよね？」

知ってる人ならわかるよね？」

こいつ例のかに頭だよね？」

作者

「まあ、俺のターーン！！って叫ぶようなやつほかにしらねえしな」

守

「完全ネタバレじゃねえか」

あとお前のリア友どういう状況で出しつもりだ？」

作者

「お前にちよっかい出して叩きのめされる感じ?」

守

「ひでえな」

作者

「安心しろ!

あいつが望んだことだ!

でもばれにくくするためにいたずら好きの糞ガキにするつもり」

守

「あんまかわんねえんじゃね?」

作者

「まあ心配だしちよっと出してみるか

じゃよろしく」

守

「任せろ『次元斬』!!」

藻

「わっ!!」

どこ?!?」どこ?!?」

作者

「よくきたな藻

お前はあいつの分身だから

名前は『右在^{ウザイ}藻^モ』

という名前にしてやるっ」

藻

「ひでえ!

俺の名前はゆ「藻」だ!」

守

「ゆ藻?」

藻

「違う!

俺は「藻」ってじゃますんな!」

作者

「ナイスつつこみさすがは関西人W」

藻

「うるさいわ!!」

第一なんやねん!!

俺出すって言ったのに関西弁の奴出すなや!!

キャラかぶってるやん!!」

作者

「だまれクローン!!」

いつもいつもギャアギャア騒ぎやがって!!

これでもくらえ!!」『SLB』!!」

藻

「ちよっ!

やばいって!ちよつまっ!

Aaaaaaaaaa!!」

作者

「藻」

作者・守

「「乙!」」

藻

「で終わらすな!」

作者

「ありがたく思えギャグ補正つけてるから殺傷設定でも死なないぜ」

藻

「ちやうわ!」

いくら死なへんくても痛みはあんなん!」

作者

「悪かったってかわりにお前が好きなあれに出してやるから」

藻

「あれって何?」

作者

「(ゴングゴング)これ使っちゃっ(ピッピ」

藻

「マジ!」

ええん!」

作者

「ああもちろんだ

iPodの半分がこれの曲のお前にはちょうどいいだろう」

藻

「よっしやあああ!」

守

(テンション高めうぜえ・・・)

作者

「じゃあ後で転送するから準備してて」

藻

「よっしやあああ!」

ところで引きの良さは?」

作者

「ワンキルが当たり前なぐらい」

藻

「よっしやあああ!」

じゃあ早速準備しにいくわ!」

守よろしく!」

守

「お前、俺の事知ってんの?」

藻

「一回読んだからな！」

守

「あっそう

『次元斬』」

藻

「まってる糞キング!!」

作者

「あいつテンション高いな

声もでかいからこの前電車の中で怒られたんだよな」

守

「そうか、なんか疲れそうだな」

作者

「守も俺の部屋から適当に持って行って」

守

「わかった『次元斬』じゃな」

作者

「さて守も行ったことだしネタ考えるか」

番外編 その二（後書き）

さあ！わかった人はいるかな！！

でもそれ以前に呼んでる人いるのかな？

誰でも感想書けるんでよければ書いてください

第七話 プらっぴらっぴになにそれおいしいの？BY作者(前書き)

さてさてサブタイ変わってるけどやろっつとしてることは変わってませんよ？

第七話 ペらっぺらっなにそれおいしいの？BY作者

守

「さて準備終わったんだけどどうやっていこうかな？」

(ブブブブブ)

守

「ん？携帯か・・・」

神

「よっ！久しぶり！元気してた？」

守

「お前は同窓会であった同級生か？」

神

「守ナイスつつこみ

ところであのバカからお前をあつちに飛ばすように頼まれたからさ
つさと飛ばすぞ」

守

「ちよっ！？みんなに挨拶したいから時間ちよっだい！？」

神

「仕方ねえな

30秒だけな」

守

「短っ!?!」

神

「はいつスタート」

守

「うおっ!?!」

やばい!?!

おーい!?!カリナ、雄馬!?!」

雄馬

「どしたん?」

カリナ

「声でかいわよバカ」

守

「今からちよつと野暮用で出かけるから他の人には旅にでたっつてい
つといてくれ!?!」

雄馬

「わかった、気いつけてな」

守

「おっ!?!」

カリナ

「早めに帰ってきなさいよ?」

守

「わかった」

神

「はい、行くぞ」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

守

「ん・・・」

ついたか？」

ここは遊戯王5・Dsの世界

ちようど5・Dsが別れたあとの話である

守

「とりあえず今の持ち物何あるかな？」

かばん、作者から借りたデッキ、財布、5万円、地図、デュエルデ
イスク等々

守

「よくかばんに入ったな・・・
ん？何か入ってる」

守へ

そのかばんはいろんなものが入っているとかじゃなくイメージしたも
のならよういできるものは出てくるかばんだBY作者

守

「あいつついに本編にまで出てきやがった・・・
とりあえず腹へったしなんか食うか」

(ドンッ！)

守

「いてっ！

何だ今の？

あっ！財布がねえ！

まさかあいつか？

まちやがれえ！！」

走るゝ走るゝ追いつゝくゝ倒して後ろから拘ゝ束

守

「あれなかなかいい曲だよなあ」

???

「ちよっ！？痛いつて！！ギブギブっ！！」

守

「さてと財布を返してもらおうか？」

???

「え？財布？ナンノコトヤラ？」

守

「よしっちよっとなっつちよっ」

守

「あれ？おまえ関西人か？」

藻

「そやで」

守

「じゃ取りあえず何で財布盗んだのか聞こうか？」

藻

「カード買すぎてお金なくなっちゃった」

守

「じゃねえよ」

「じゃ、取りあえず金稼ぎにいくか」

藻

「どこえ？」

守

「え〜と、地図によると・・・」

藻

「何！？その便利な地図！？」

守

「紙からの贈り物」

藻

「頭大丈夫？」

守 「いたって普通だ」

藻

「ところで場所は？」

守

「何か決闘闘技場があるらしい」

藻

「じゃとにかく」

守

「行ってみますか」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

守

「そっちどつっ？」

藻

「十五連勝、そっちは？」

守

「同じく」

藻

「しかし引き良すぎやろ
基本ワンキルやで?」

守

「補正じゃね?」

藻

「メタ発言乙W」

(15番の方ステージにあがってください)

守

「おっ俺だ」

藻

「いつてら」

・・・

敵A

「何だ?ひよろひよろじゃねえか!?
いかにも弱っちそうだな!」

守

「寝言は寝て言え
筋肉ゴリラ」

敵A

「・・・てめえ、ぶち殺す!」

守

「俺に勝てたらサンドバックになってやるよ！」

敵A

「上等だ!!」

守・敵A

「デュエル!!」

敵A

「先行は俺がもらっぜ！」

ドロロー！俺はカードを二枚伏せサファイアドラゴンを召還！

ターンエンド！」

サファイアドラゴン

(AT1900)

守

「俺のターン、ドロロー

俺は手札から神の居城バルハラを発動

効果で手札からスプリンデット・ビーナスを特殊召還

さらに俺は手札から神秘の代行者アースを除外しマスターヒュペリ

オンを特殊召還

さらに手札から天空の聖域発動

そして力の代行者マーズを召還」

スプリンデット・ビーナス

(AT2800)

マスターヒュペリオン

(AT2800)

力の代行者マーズ

(A T O)

敵 A

「攻撃力ゼロを攻撃表示！？
なめてんのか！？」

守

「いたって真面目だ

スプリンデット・ビーナスで攻撃

スプリンデット・ビーナスがフィールドに表側表示で存在するとき
バトルフェイズ中相手のモンスターは攻撃力・守備力が500ポイ
ントダウンする」

敵 A

「なっ！？」

サファイアドラゴン

(A T 1 9 0 0 1 4 0 0)

V S

スプリンデット・ビーナス

(A T 2 8 0 0)

守

「攻撃力の差は1400
よって1400のダメージだ」

敵 A

「こんぐらいなんてことないぜー！」

守

「マスターヒュペリオンでダイレクトアタック！」

敵A

「新しくてに入れたカードを見せてやる！畏カード半反射発動！
自分が受けるダメージを半分にして相手に同じだけダメージをあた
える！」

守

「ぐっ！」

敵A

「俺の手札にはブラックホールがある！
次のターンお前のモンスターは全て破壊されダイレクトアタックを
受けることになる！」

「俺の勝ちだな！！」守

「なに勘違いしてやがる

俺のバトルフェイズはまだ終了していないぜ」

敵A

「なっ！？

てめえ往生際が悪いぞ！

手札はなし伏せカードもなしフィールドには攻撃力ゼロのモンス
ターとすでに攻撃したモンスターだけたるうが！」

守

「早まるなよ

力の代行者マーズはフィールドに天空の聖域がある場合相手とのラ
イフの差だけ攻撃力が上がる

お前のライフは1200

俺のライフは2600

その差は1400

よって攻撃力は1400だ！」

敵A

「なっ!？」

守

「お前それしか言えねえの？」

力の代行者マーズでダイレクトアタック！」

敵A

「ぐはあっ!」

審判

「勝者ワンターンキルで守！」

守

「どうだった？」

藻

「圧勝やったなあ

すごい引きやなあ」

守

「だろ？」

藻

「次は俺かな？」

守

「まあがんばれや」

藻
「…おじ…」

第七話 プらっぷらっぷらっなにそれおいしいの？BY作者(後書き)

次回藻が戦う!・・・予定

第八話 デッキはリアルの物ですよ？（前書き）

誰か感想書いてくださいーい

・・・寂しい

第八話 デッキはリアルな物ですよ？

敵 B

「さあさつさとやろうぜ！

さっきのデュエル見て興奮してんだ！

押さえられねえよ！」

藻

「うるさいなあもうちょい静かにできひん？」

藻・敵 B

「「デュエル！」」

敵 B

「先行は俺がもらうぜ！

ドロー！

俺はモンスターを一体セット！

カードを二枚伏せターンエンド！

さあてめえのターンだ！」

藻

「分かってる！

ドロー！

魔法カード手札抹殺発動！

お互いに手札を全て捨て捨てた枚数分カードをドロウする！」

敵 B

「ちっ、じゃまなカードを！」

藻

「今手札が捨てられた事により墓地に闇属性が三体！
出でよ！ダークアームドドラゴン！！」

ダークアームドドラゴン

(AT2800)

敵B

「一ターン目で攻撃力2800！？
すげえやりがいがあるぜ！！」

藻

「俺にはない

ダークアームドドラゴンの効果発動！

墓地の闇属性モンスターを除外する事でフィールド上のカードを破
壊することができる！

俺は三体除外してお前のカードを全て破壊する！！」

敵B

「反則だろう！？」

藻

「一応正攻法だ

さらにダーククルセイダーを召還！

手札から闇属性のモンスターを捨てることで攻撃力が400ポイン
トアップする！

俺は三枚すてる」

敵B

「攻撃力合計5600！？

・・・俺の・・・負けだ・・・」

審判

「勝者藻！」

藻

「相手が悪かったな」

守

「おかえり

どうだった？」

藻

「引きがよすぎて

楽しくない」

守

「じゃあちよっとおもしろいとこいかねえか？」

藻

「おもしろいとこ？」

守

「ああ、バトルジャンキーと戦えるぜ？」

藻

「まさかあいつか？」

守

「そう、あいつだ」

藻 「じゃ早速いこう!」

↳二時間後↳

守 「結構かかったな」

藻 「マジでマジ?」

守 「某キングの住処
あのデッキ試してみたら?」

藻 「そうだな
下手したらなにもしないで勝つもんな
あいつのプライドをへし折ってやるぜ!」

????
「騒がしいぞ!
俺と一戦交えたければ入ってくるがいい!」

守 「まさかのお迎えだな」

藻 「orz状態にしてやる」

(^ | ^) () () スタスタ

????

「俺の名はジャック・アトラス！
さあかかってこい！！」

藻

「じゃ遠慮なく」

ジャック

「俺のター「ちょっと待って」何だ！！」

藻

「手札に封印されし者のパーツが揃うとき勝利が確定する！
くらえ！『怒りの炎！エグゾード・フレイム』！！！」

ジャック

「な！？

ぐわああああー！！！」

守

「勝者、藻！」

ジャック

「また負けた・・・これではキングとしての威厳が・・・」

藻

「何かブツブツ言ってるけどどつじする？」

守

「ほっとけ行くぞ」

藻

「次はどこえ？」

守

「博士のこと」

藻

「じゃ行きますか」

（三時間後）

????

「俺は遊星よろしく」

守

「俺は守よろしく」

「じゃとにかく……」

守・遊星

「「デュエル」」

遊星

「俺ターン！ドロ」ちよい待ち「どうした？」

守

「封印されし者のパーツが以下同文！

『エグゾードフレイム』！！」

・
・
・
・
・
・
・
・
・

守

「A a a a a a a a a a a ! ! . . . なれたな . . .」

藻

「そうだな . . .」

守

「ってゆうか詐欺じゃね？」

藻

「なにが？」

守

「だって二話で終わっただしかに頭数秒しかでてねえよ」

藻

「そついやそつだな」

守

「ま

守・藻

「「いいか」「

第八話 デッキはリアルな物ですよ？（後書き）

5・DS編二話で終了！

理由は遊戯王のルール知らない人がいたら読者減るじゃん？
って事です

第九話 あ、これ？チートだよ？（前書き）

守が帰って来ましたよ

おまけ付きで

第九話 あ、これ？チートだよ？

守

「ただいま」

カリナ

「いがいと早かったわね」

雄馬

「おかえり守」

藻

「おじやま」

カリナ・雄馬

「誰!？」

守

「作者のリア友」

カリナ

「ふん」

雄馬

「よれしくな」

藻

「よろしく」

ところでさっきこっちきたときに守の足が曲がっちゃいけない方向

に曲がってたけど・・・」

守

「治した」

藻

「治した!？」

「どうやって!？」

守

「それはあつちにとばされる前に・・・」

・・・
・・・
・・・

雄馬

「光の魔法は身体を修復できるで」

守

「マジで!？」

雄馬

「大マジ

ついでに色々と身体を改造したりできるで」

守

「ということとは・・・

足治せんじゃん!！」

雄馬

「そ、やからのばしてん」

守

「メタ発言お・・・今更か・・・」

雄馬

「そついやそつやな」

・

・

・

守

「つてなわけで治した」

藻

「無駄な部分多くない？」

守

「気にしたら負けだ!!」

カリナ

「作者も普通に名前出してるしね」

雄馬

「でもこの小説検索しても出えへんらしいで？」

守

「じゃ読者いないんじゃない？」

カリナ

「それもそうね・・・」

藻

「なにこれ・・・メタ発言だらけ・・・」

雄馬

「気にしても変わらへんよ？」

藻

「終わってる・・・」

守

「これ見てる人って作者の知り合い以外いるな？」

カリナ

「そろそろやめにしない？」

本編なのにメタすぎるし・・・」

守

「それもそうだな」

雄馬

「とにかくこの藻の事どうする？」

(ブブブブブブ)

守

「ん？ああ携帯か・・・はいもしもし」

神

「お前らの話はしっかり聞いていた」

守

「ストーリーカーで訴えるよ?」

神

「人の法は俺には通じん!!」

「でそいつに同じようにスキルあげたから説明してあげてね?
じゃそういうことで」

守

「ちよっ!? まで!!... 切りやがった」

カリナ

「あれ何て言ってた?」

守

「同じようにスキル付けたから説明してやれだよ」

雄馬

「じゃさくつと説明すんで?」

〈数分後〉

雄馬

「.....ってことなんや」

藻

二十分後

守

「魔法決まった・・・か？
何これ？」

雄馬

「ちよつとO H A N A S Iしててん」

守

「ああそれで気絶してるのか
ほら起きろ」

藻

「…(ビクッ…ビクッ)…」

守

「無理そうだなじゃ仕方ないな
『ベホ』!!じゃ楽しんでね」

藻

「あれ？ここは？確か雄馬にO H A N A S Iされて…」

雄馬

「も一回O H A N A S Iしよか？」

藻

「え？またつて何を？その鞭は何ですか？ちよつ!!まっ!!A a
a a a a a a a a a!!やめっ!!N o o o o o o o o!!ちよつ!!

「ほんとに!! G y a a a a a a a a!!」

雄馬

「フッフ…ハハハ、アーハハハハハハハハハハハハハ!!」

カリナ

「あれ?守今叫び声が聞こえたんだけど…」

守

「気のせいだ」

カリナ

「そう?ならいいけど」

守

さて暇だしどうするか…

「金稼ぎにでも行くか…」

その後守はこの国の財産の四分の一位稼いだとか稼いでないとか一方その頃

神

「さて、なかなか育ってきたな」

?????

「居るか?」

神

「ん?ああお前か」

???

「準備はできたか？」

神

「ん〜後ちよつとかな？」

???

「なるべく早くしてくれよ？」

神

「分かってるよ君の世界がかかってるんだから」

???

「それにしても大丈夫なのか？」

神

「何が？」

???

「例の四人のことだ」

「後一人ぐらい居た方がいいんじゃないのか？」

神

「それはそうだけど…」

???

「どつした？」

神

「力に見合った人物がこつちにはいないんだよ」

???

「ならこちらから一人送ろう」

神

「いいのか？」

???

「大丈夫だ実験済みだからな」

神

「何の実験だよ」

???

「今の私の力でどれほどの力を作れるのかだ」

神

「それがどう関係してるんだ？」

???

「全力で作り全力で壊そうとしたところ失敗した」

神

「要するに頑丈ってわけね」

???

「そっだ、正確には壊せたがすぐに元通りになった」

神

「それは凄いね
細胞すら千の部品に分けることができる君の力で壊したのに復活し
たわけだ」

???

「そうだ、なのでまず死ぬことはない」

神

「それは人なのか？」

???

「一応人だ

力はすでに持たせてある

すぐにそちらに送ろう

場所は何処だ？」

神

「1 5 6 3 2 6 7 4 2 3 6 5 8 0 0 4 2 3 6 0 1 4 5 6 3 5 8 7 1
8 6 2 1 8 6 3 2 4 6 a d t p m t g 7 4 2 3 6 8 4 5 3 だ」

???

「相変わらず複雑な場所におくな」

神

「干渉しにくいからな」

???

「変なところ真面目だな」

神

「ほっとけ」

「?..?」

「では頼むぞ」

神

「ああ任せろ」

第九話 あ、これ？チートだよ？（後書き）

さてさて次の話から新展開！！

神の話し相手は誰なのか！！

まだ考えてませんが（笑）

番外編 その三(前書き)

嬉しすぎたっい……

番外編 その三

守

「大変だー!!」

作者

「どうした？藻が暴れ出したのか？」

守

「だとしたら問題ねえんだけど
これ見ろ」

作者

「何を驚いて……………」

(;「」) ジー…

(. .) こっくっ

((() !

えらいこっちゃー!!」

守

「だろ!？」

作者

「この小説読んでる人知り合い以外に居たー!!」

守

「まあそれもそうだが…
そうじゃなくって!」

作者

「なんだよ！これ以上うれしいことがあんのか！？」

守

「もちよい見てアクセス数のとこ」

作者

「なんだよどうせ1000とかそのへん……
何ですとー！？」

守

「だろ！？」

作者

「まさかこの壊れた小説が1000アクセスだと
ほとんどふざけて書いただけなのに……」

守

「よつするに俺達はふざけて作られたのか？」

作者

「そついうこと」

守

「じゃねえよ……
ひでえよ……」

そして時々空気の主人公つてのもひでえよ……」

作者

「うるせえ……」

「この後完全な空気にしてやろうか!？」

守

「いやマジでやめろよ？」

主人公じゃなくなるから」

作者

「安心しろリアルの方の藻からクロスしようぜ的な事を言われてる」

守

「じゃしばらくは大丈夫だな」

作者

「にしても殆ど描写なしで分かんのかな？」

守

「例えば？」

作者

「お前が男の「もうわかった」え? いいの?」

守

「言わせちゃいけない気がした」

作者

「大当たりお前の傷口を開こうとしてたんだ!」

守

「お前は鬼か？」

作者

「貴様等の神だ」

守

「ふざけなくていいから」

作者

「ふざけこそがこの小説の原動力だ!」

守

「殴っていいか?」

作者

「殴ってみろやあ!

殴ったら俺が今までで一番タイトルと矛盾してテンション下がった曲聞かせてやらあ!」

守

「何て曲?」

作者

「ファイト」

守

「伏せなくていいの?」

作者

「まあ応援の言葉でもあるし……」

守

「特徴は？」

作者

「歌ってる人が泣いてた」

守

「テンション下がりそうだな」

作者

「だろ？」

ところでさ

せっかくアクセス数1000突破したんだからもうちょいキャラ出していい？」

守

「いいんじゃない？」

作者

「全員カモン！！」

守

「全員かよ！？」

カリナ

「呼んだ？」

雄馬

「どないしたん？」

藻

「何？」

神

「暇つぶしに来たぞ」

スタッフさん

「どうしたんですか？」

作者

「九割ほど集まったな」

守

「スタッフさんってキャラなの？」

作者

「まあ一応」

スタッフさん

「そうですね、一応ですか」

作者

「あれ？もしかして死亡フラグ立てちゃった？」

スタッフさん

「ちよつとO H A N A S I I しましょうか？」

作者

「誰か助けて〜！」

全員合掌

作者

「薄情者おおお!!」

スタッフさん

「さあ逝きますよ?」

作者

「字が違う!!」

そしていい顔してる!!

完全死亡フラグ

〃ヾ(＊)(ノ)

全員

「「「逝つてらっしゃい」「」」

作者

「逝つて来ます…」

守

「さて作者が逝つたので進行役は「俺がやる!!」うつせえ!!引
つ込んでろ!!」「がふっ!?!」「さてじゃまな藻を消したところで進
行役は私守が!!」

カリナ

「ん?何か紙落ちてるわよ?」

守

「ん?何々?」

(ゲスト呼んだからそいつと一緒に遊んでねBY作者

PS

本編にも出る予定だ)

守

「ゲスト？」

雄馬

「どんな人やる？」

神

「俺知ってるよ？」

カリナ

「へえどんな人？」

神

「え」と

一人は被害者が出る」

雄馬

「怖っ!？」

神

「安心しろ被害者は確定してる」

カリナ

「誰？」

守

「そいつ不幸だなあ」

神

「お前」

守

「俺？」

神

「うん、お前」

守

「そんなバカなこと……あれかな？」

カリナ

「え？あああのこね」

雄馬

「こつち来たら？」

守

「……まずい……何かがまずい……本能が逃げると言ってる…………よって逃げる！」

???

「逃がしませんよ……！」

守

「ぐはっ!?
な、何が…?」

???

「フッフ」

〈数分後〉

守

「……………うん……………ここどこだ?」

???

「フッフ目が覚めましたか?」

守

「ここどこ?」

お前誰?」

???

「私は英子です」

守

「英子?確かどこかで……………」

英子

「レッツ男の娘!」

守

「あ……………」

藻

「かわいいそうに……」

作者

「まあとりあえず……」

藻

「そうだな……」

作者・藻

「ご愁傷様」(合掌)

守

「Help Meeeeeeee!!」

英子

「次はこの服です」

守

「Aaaaaaa!!!!????」

番外編 その三(後書き)

本当にありがとうございます!!
これからも頑張ります!!

第十話 これはどのホラーですか？（前書き）

さっきアクセス数見たら1500入ってました
皆さんありがとう！！

第十話 これはどこのホラーですか？

カリナ

「暇だから模擬戦でもしない？」

雄馬

「ああ、それええなあ
ちよつと体動かしたかつてん」

守

「ん？お前等何やってんの？」

カリナ

「じゃあ外出ましようか！」

雄馬

「そやな」

守

「あのくお二人さくん」

カリナ

「手加減しないわよ！」

雄馬

「当たり前や！」

守

「ああもしかしてこれが空気？」

ついに作者がやりやがった…」

神

「おーい守」

あれ？いねえのかな？」

守

「てめえの目の前にいるよ」

神

「ん？ああいたのか」

守

「最初からな」

神

「ちょっと預かってほしい物があんだけど」

守

「何？」

神

「女の子」

守

「女の子！？」

どっから攫ってきた！！」

神

「攫ってねえよ！！」

「預かりもんだ!」

守

「で?そこは?」

神

「そこにいるよ」

守

「あそこか?」

神

「そうそうあの『ソルレーザー』!」(ジュンッ)どこ行った?
「?」

守

「いや今のに当たったんだよ!」

神

「じゃあの灰の塊が!」

カリナ

「どうしたの?」

守

「今お前の魔法で女の子が灰になった」

カリナ

「そんなわけないでしょ?

現に人はいないもの」

守

「いやだから灰になっただよ
ほらそこのやつ」

カリナ

「え？」

……………あはは…（パタン）

守

「うおい!？」

倒れてんじゃねえよ!？」

神

「安心しろよ

ほら見てみる」

守

「安心出来るか!？」

第一何を見るって……………」

神

「な？」

守

「何で灰が人の形になって起きあがってんの!？」

神

「驚くのはまだ早いぜ？」

守

「これ以上何を（バサッ）…何？
今何があつた？」

灰から女の子が出てきました

守

「んなバカなああ！！」

神

「あいつ細胞レベルで分解しても生き返るんだよ」

守

「それは何てチート？」

神

「さらに凸ピンだけで神龍が粉々に！！」

守

「チートすら生ぬるい！？
で、何で俺らが預かんの？」

神

「それは戦力が足りないから」

守

「は？何の？」

神

「お前等」

守 「チート×4で戦力不足とか何だよ!?
しかも何させようとしてんの!？」

神 「異世界の邪魔者退治」

守 「相手そんなに強いのか!?
つてかそんな事させようとしてたのか!？」

神 「元々そのつもり(笑)」

守 「(笑)じゃねえよ!!
何でそんなことしなきゃいけないんだよ!！」

神 「俺の友達の頼みだから」

守 「お前友達いたんだ？」

神 「よし後で作者に色々頼んどけ」

守 「マジでやめろ」

そしてメタ発言へらそうぜ
「

神

「わかったよ

じゃ頼んだよ？」

守

「待てよ！……行きやがった……」

????

「ねえ……」

守

「何だ？」

????

「あなたかわいいわね」

守

「は？」

????

「うふふふふ」

守

「ま、まさかお前は……！」

????

「英子です！」

覚悟してください！」「

守

「ちよっ!?!まっ!?!」

A a a a a a a a!?!」

英子

「この服着てくださいい」

カリナ

「入るわよ〜……お邪魔しました!」

守

「お邪魔じゃないから!

マジで助けて!」

英子

「逃がしませんよ〜」

守

「A a a a a a a a!」

誰かH e l p m e e e e e!?!」

藻

「何やってんの?」

守

「藻!H e l p m e!」

藻

「何か楽しそうやから手伝っわ」

英子

「ありがとうございます」

守

「裏切りものおおー!」

カリナ

「……さてどうしましょう?」

雄馬

「どしたん?

いきなり走り出して」

カリナ

「あ、雄馬」

雄馬

「模擬戦続きやるか?」

カリナ

「そうね…今のは見なかったことにしましょう」

雄馬

「今のって?」

カリナ

「この部屋の中」

雄馬

「?」「Help me!」なにやってる……ほな行こか」

カリナ

「そうね」

「一方神は」

神

「なかなか仲良くやってるよ」

「???」

「そうか…それはよかった」

神

「ところでまだもちそうか?」

「???」

「なんとか保っている状態だな」

神

「そうか…じゃああいつらに早く強くなってもらっかな?」

「???」

「なにをする気だ?」

神

「もう一つスキルを与える」

「???」

「むちゃだ!!」
人間が耐えられるわけがない!!」

神

「大丈夫だよ

…あいつ等なら」

「そのころ守は」

英子

「さあ次はこの服ですよ」

守

「誰がこんな服! …… っていつの間! …?」

英子

「似合ってますよお」

守

「今どうやって着せたんだ! …?」

英子

「乙女の秘密です」

藻

「気にしたって意味ないぞ?」

守

「もつやだ……」

誰か助けて……」

英子

「うふふふ」

カオス状態だった

・

・

・

カリナ

「さーていい汗かいたし

シャワーでも浴びますか！

雄馬はどうする？」

雄馬

「心配やから様子見てくるわ」

カリナ

「そう？じゃお先」

雄馬

「守大丈夫やるか？」

英子

「はあ……かわいい守さんがいっぱい……し・あ・わ・せ」

雄馬

「あの子がここにおるんやったら大丈夫かな？」

藻

「待てー！！はやまるなー！！」

雄馬

「何があつたんやろ？」

(^ | ^) () () () …… 移動中

守

「H A N A S E ! ! !」

藻

「いや

はなしたら落ちるやん!？」

守

「あんな醜態をさらして生きていたくない!!」

雄馬

「何があつたん？」

藻

「女装させられて写真撮られて

さらにその写真を焼き増しして売られた」

雄馬

「ああ…怖…」

守

「俺は死にたいんD A ! ! !」

藻

「もう遊戯王ネタいいから！」

守

「H A N A S E ! !」

雄馬

「聞いてへんな…
ちよつと守〜」

守

「何だよ！！俺は（トンッ）……」

藻

「………気絶した……」

雄馬

「ベットに運んで縛り付けといて」

藻

「OKまかしけー！」
（タッタッタッ）

雄馬

「さてシャワーでも浴びに行こかな？」

第十話 これはどのホラーですか？（後書き）

さてさて災難続きの守くん

次はどんな目に遭わせようかな？

番外編 その四（前書き）

カリナ

「何であたしたちが出てないの？」

雄馬

「説明してもらおか？」

怖い怖いまあネタ上壊れてないから

カリナ

「じゃ私壊れるわ」

その心意気が壊れてるW

雄馬

「僕も頑張ろかなあ」

一人は真面目がいるからやめて

雄馬

「わかったわあ

出番増やしてや？」

OKOKまかしとけ

番外編 その四

作者

「やくば〜い〜!!」

守

「何をパニックってんだ？」

作者

「明後日沖縄行くんだよ!!」

守

「マジか!？」

作者

「マジだ!!」

そして学校で行くので更新ができん!!」

守

「ついてっちゃんだめか？」

作者

「キャラが何を言う!!」

マジでどうしよう!？」

ユニーク200人突破してるのに読者の皆さんに申し訳がたたない
じゃないかあああ!!」

守

「落ち着け!!」

作者

「ガフツ!？」

いきなり殴んなや!!」

守

「だから落ち着け!!」

お前はパニクリすぎだ!!」

作者

「だってやべえよ!!」

30日まで沖縄だよ!!」

守

「結局お前はどっしたいんだ!？」

作者

「家で小説書いていたい」

守

「引きこもりか!？」

作者

「だって書き始めたばかりだし!

藻をいたぶるの楽しいんだよ!!」

守

「お前あいつから電話かかってくるぞ?」

作者

「しまった！」

守

「まあとりあえず断りいれて

しばらく投稿出来ないこと伝えりゃいいじゃねえか」

作者

「いや俺さぼり癖つくから」

守

「だからてめえリアルのび太なんだよ！！」

作者

「うつせえ！！」

読者減るの嫌なんじゃあああ！！」

守

「お前マジで贅沢だな

沖縄だぞ！？沖縄！？

そこは迷わず行けよ！！

そして自慢話でもしろやあああ！！」

作者

「ああどうしよう…」

マジで緊張するわあ…」

守

「何故に？」

作者

「学校行ってないから」

守

「不登校かよ!？」

かなりあれなことカミングアウトしたな!？」

作者

「ちげえよ!

フリースクール行ってんの!！」

守

「フリースクールって何？」

作者

「フリースクールは不登校の為の学校だ
事実上普通の学校より内容ハードだ」

守

「じゃ何でそっち行ってんの？」

作者

「ギター弾けるから」

守

「お前ギター弾けんの!？」

作者

「失敬な!！」

ドラムもいけるわ!！」

守

「お前はほんと優柔不断だな」

作者

「うるへえ！

てめえは英子と遊んでろ！！

カモン英子！」

英子

「はい英子でえーす」

守

「キャラ固まってねえのに出てくんじゃねえ！！」

英子

「そんなひどいこと言つと着せかえしちゃうよ？」

作者

「そうしろ

カモン藻」

藻

「守、今回は死のうとするなよ？」

守

「結局やんのかよ…！」

英子

「まずはこの服よ」

守

「誰が…体がかつてにいい!?
お前か!!藻!!」

藻

「あ、バレた?」

守

「うん今発覚した
てめえ雷の魔法そこまで使えたのか!!」

藻

「うるせえ!!」

英子

「確かに五月蠅いわね
気絶させましょう」

藻

「OKまかせろ!!
『バオウ・ザケ ガ』!!」

守

「気絶じゃすまねえええ!!」

英子

「じゃ着せかえしましょ」

藻

「ネタにしてやらあ」

作者

「藻がリアルとかけ離れてきた…

まあとりあえず2011年5月28日から5月30日は沖縄にいる
ので更新できません

帰ってきたら沖縄で仕入れたネタ入れますからそれまで待っていてく
ださい」

守

「すしネタみたいに言うなあああ!!」

英子

「麻酔!」

藻

「『ザ ルガ』!!」

守

「A a a a a a a!! (ガクッ)」

作者

「ではみなさん待っていてください!!」

番外編 その四（後書き）

と言つわけでは皆さんしばらくの間をよつたらー！ー！トトト（ノシ

第十一話 修行？やらなきやだめ？（前書き）

沖縄に台風が来てるから

延期になりました

よっしやあ書くぜえ！

第十一話 修行？やらなきゃだめ？

神

「お前等

今日は修行もかねて

総当たり戦を開始する！」

守

「お前マジで言ってるのか？」

神

「あつたり前だ！」

カリナ

「にしても何でいきなり総当たり戦？」

神

「それは作者がネタ…ゲフンゲフン！誰が一番強いかわかるから」

雄馬

「今メタな発言でたよな？」

神

「さあ何のことやらさっぱりして…」

藻

「俺まだ使う魔法さえ出てないんやけど」

全員

「「「お前は別にいい」「」」

藻

「お前等切り刻むぞ？」

守

「かかってこいやあああ！！」

藻

「よっしゃやったる！

おおおお！！」

守

「Z I G E N Z A N ! ! (笑)」

藻

「あああああ！？」

神

「勝者守W」

カリナ

「いやまだ始まってないわよね？」

神

「忘れてた」

雄馬

「守、取りあえず藻をこっちに戻して」

守

「OKOKまかしとけ!

Z I G E N Z A N!! (笑) P A R T 2」

藻

「……………」

カリナ

「いき止まってる…」

全員

「「「なあああ!?!?!」」」

守

「俺に任せろ!

『魔神脚』!?!」

説明!

魔神脚とは高く飛び黒炎を纏ったけりをお見舞いする技である!!

藻

「じほおおお!!」

がっ! かつ! (ガクッ) 「

守

「やりすぎた

『BE HO』!?!」

全員

()() (出来るならそうしろよ)()()

藻

「殺す気かあああ!!」

守

「後五秒ほっとけば死んでたよ」

藻

「そついう問題じゃねえ!!」

守

「まあまあこれやるから」

藻

「こゝこれは!!」

守

「リアルのお前が一時欲しがってたダーク・クリエイターだ!」

藻

「おお…ん？」

裏白紙じゃねえか!」

守

「H A H A H A H A

実は持ってなかったりする!!」

神

「もういいから早く始めようぜ?」

雄馬

「取りあえず何か食べよか?」

腹が減っては何とやらって言うしな!」

守

「なら任せろ!」

カリナ

「何?買ってきてくれんのか?」

守

「甘い!トリのメロウコラより糖度がある!」

見よ!

『次元斬』!」

(ゴロゴロゴロ!)

藻

「お前いつの間にそんなに溜めててん…」

守

「クエスト行ったときとか

その金で買った食料とか

溜めてるうちにこんな量になりました」

カリナ

「これ腐ってない?

大丈夫?」

守

「安心しろ俺の異空間では

時が1000000000000000000分の1になる!」

雄馬

「ほんまや！」

採ったばかりの新鮮な奴もあんで！」

藻

「そついやお前頭良いんだつたな」

守

「とにかくこれで食料は確保だ！」

神

「じゃ始めるよ？」

守

「お前が審判やんの？」

神

「暇だから」

守

「まあいいか……」

神

「じゃ一回戦！」

藻VSカリナ！」

藻

「ストレス発散じゃあああ……！」

カリナ
「もう始めてもいい？」

神
「試合開始！」

藻
「『バムーチヨ』！！』」

カリナ
「甘い！」

『鳳凰駆天』！』」

守
「炎の翼で風を起こして飛ぶのか！」

雄馬
「理論上可能やけど
普通の魔道士じゃ無理やな」

カリナ
「『鳳凰滑脚』！！』」

守
「赤い炎を全身に纏った魔神脚
つてところか」

藻
「『バオウ・ディスグル』！！』」

カリナ

「!？」

くっ!

守

「うまいな雷の龍を纏った手で尻払おうとした藻
それに気づき瞬時に方向を変えたカリナ」

雄馬

「二人ともだいぶ強なったなあ」

藻

「『虎牙爪拳』!!」

カリナ

「『鳳凰爪就』!!」

(ガキイイイ!!)

守

「風を纏い手を虎の牙や爪のようにするのか」

雄馬

「カリナも足に炎を纏って鳳凰の鉤爪のようになってる」

神

「二人は十分強いな」

藻

「絶対負けねええ!!」

カリナ

「こっちだって！」

藻

「（ガッ！）」

守

「石を拾った？」

藻

「『レールガン』！！！」

雄馬

「またの名を超電磁砲やな」

カリナ

「『アイス・シールド』！！！」

（ガッッ！）

カリナ

「『アイス・ランス』！！！」

守

「氷の盾で防御してすぐに大量の氷の槍で攻撃
なかなか強いな」

神

「お前等いちいちうるさい」

守・雄馬

「だって暇だし」

神

「技でも考えろよ」

守・雄馬

「それは断る」

藻

「『暴風壁』！更に『サンダー・パイル』！！」

カリナ

「相容れぬ物が交わりし時

神の力をこえる力となる！！

『コールド・ボルケーノ』！！」

藻

「やつべ！？

ガフツ！！」

神

「勝者カリナ！」

守

「はい治療」

「お疲れ」

藻

「腹に穴があいた…」

カリナ

「ちよつとやりすぎたかな？」

神

「はい次守VS雄馬」

守

「やったらあああ!!」

雄馬

「色々試したかってん」

カリナ・藻

「私達はほつときっぱですか？」

神

「まあ後で話聴くから」

守

「さつさとしろやあ！」

神

「そうせかすな

試合開始！」

守

「『キャンセル・ローブ』!!」

雄馬

「『水龍砲』!!!」

守

「キャンセル・ローブの前では…（バツシャアア！）全ての魔法は無力！」

雄馬

「なるほど、魔法無効のローブか」

守

「いや吸収だ

そして魔力は俺に供給される」

雄馬

「やっかいだな」

藻

「なんか喋り方変わってない？」

カリナ

「あ、知らなかったっけ？

あいつ戦うとき性格変わるのよ」

藻

「何か怖い…」

雄馬

「これは吸収出来ねえだろ！

『ロックシュート』！」

守

「甘い！」

あまたの武器を砕きし聖なる盾よ
闇に染まりて現れる！

『アルテミスの邪盾』！！』

(ガガガガガ！)

雄馬

「ちっ！防御も万全か！」

守

「次はこっちだな

吸血鬼と呼ばれた英雄よ！
剣に宿り我が力となれ！

『吸血魔剣 ドラキユール』！！』

雄馬

「その短剣、魔力でも吸うのか？」

守

「いや違う

この剣は傷口から血を吸い、切れ味がます」

雄馬

「なら気にすることねえな！」

(ドンッ！)

守

「いやいや十分凶悪だよ（シュッ）」

俺は光の魔法で素早さを上げることができる」

雄馬

「!？」

守

「遅いつ！（シュッ）」

（バシャ！）

守

「水!？」

雄馬

「そいつは俺の分身だ」

守

「なっ!？」

雄馬

「『グラビティ・バインド』!！」

守

「う、動けない…」

雄馬

「それで動かれたらこっちがビックリだよ

『ギガントセイバー』!！」

守

「詰めが甘い！

『次元転移』！」

雄馬

「消えた！？」

守

「『影踏み』」

雄馬

「な！？

動けない！？」

守

「俺が影を踏んでる間お前は動くことも魔法を使う事も出来ない
終わりだな」

雄馬

「くっ！」

神

「勝者守！」

守

「立てるか？」

雄馬

「当たり前やん」

神

「えーっと？」

今戦ってない奴いるか？」

英子

「私を忘れてます」

全員

「「「「「あ、忘れてた」「」「」「」

英子

「皆さん酷いです！」

第十一話 修行？やらなきゃだめ？（後書き）

携帯の電池が無くなりそうなので終わります

第十二話 修行という名のイジメ(前書き)

後書きでアンケートがあります

投票は感想かメッセージでお願いします

第十二話 修行という名のイジメ

英子

「酷いです！忘れるなんて！」

神

「まあまあ落ち着けお前もやらせてやるから」

英子

「私はバトルジャンキーじゃありません！」

神

「どつちにしる強制参加だ（笑）」

守

「それはいいから次誰と誰だ？」

神

「じゃくじ引きで」

守

「総当たりのルールどこいったあ！？」

神

「まあまあ気にすんなって」

気にするわ！

まったくうちの神は適當すぎないか？

神

「適当で悪かったな」

守

「地の文読むな！」

神

「まあいいんじゃないの？」

守

「はあ……」

まったく、もう少し真面目にやってほしいね

藻

「真面目にやってたらこの小説なりたたねえよ！」

守

「貴様もかあ！」

藻

「へぶつ！？」

守

「てめえ作者が色々悩んで今もセリフの上についてるあれ 消すかどうか悩んでんだぞ！」

まあまあ真面目にやってんだよおおお！！」

藻

「話が反れてる！」

一回戻して！」

守

「ん？ああ電波だ」

カリナ

「あんたも十分メタじゃない……」

守

「うるへえ！

あの作者に言え」

カリナ

「どつやるのよ？」

守

「それもそうだな」

神

「さっさとしてくれない？

勝手に始めるぞ？」

雄馬

「始めんのはいいけど誰と誰になったん？」

神

「英子VS藻」

藻

「よしあのバカが技名間違えてたけど今度こそ！」

英子

「守ちゃんがよかったわ……」

守

「いつの間にかちゃん付けになってる……」

神

「準備は…別にいいか…」

試合開始！」

藻

「(ザラッ)『レールマシンガン』!」

はい今度からこの地の文で解説します

藻はパチンコ玉らしきものを大量にレールガンの要領で打ち出した
あれはマシンガンより威力あるな絶対…

英子

「そんな物!

はっ!(ブアッ!)(バラバラバラ!)

回し蹴りの風圧で弾を止めるとかどんだけチート?ってかぜ じゃ
ね?

英子

「今度はこっちからいきますよ!

(ダンッ)『ビッグバン』……」

腕が肥大化した!?

英子

「『インパクト』!!」

藻

「なっ!? 『瞬速』!!」

(ドツゴオオオオ!!)

うわぁ…

直径10mぐらいのクレーターが出来ましたよ?

藻

「あつぶねえ…」

避けててよかったぁ…」

藻は雷の魔法で足を強化し

さらに風の魔法でスピードを上げた状態でその場から離脱

あの二つはスピードに特化しているからこそ避けれたんだな

英子

「しづといですね…」

藻

「こんなにすぐ終わってたまるか!!」

英子

「ならこれは…」

どうですか!」

藻

「ぶっ!？」

くっ!何だ今の!？」

今遠くで繰り出したパンチが離れた場所の藻に当たったように見え
た…

英子

「『パンチ・シヨット』」

その名の通りパンチの威力を飛ばす技です」

全員

()()(何てチート?)()()

藻

「やられてばっかいられるか!

『瞬速』!『カナムル』!」

英子

「!?!あっ!くっ…!」

相手の懐に入りスタンガンより強力な電気を叩き込んだか…
にしても…

藻

「よく気絶しなかったな…!」

そうスタンガンですらくらったら大の大人でも気絶する
それよりも強力な電圧でよく膝を就く程度ですんだな…

英子

「私は頑丈なの…よっ！」

藻

「ぐふっ！？」

飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで
回って回って回って回って回る
そして10mほど吹っ飛んだ

神

「勝者英「M A D A D A I！」社長W」

藻

「まだまだいけるぜ！」

英子

「じゃあ…(シュッ)」

藻

「ぐっ…！」

英子

「気絶しててね？」

藻

「まだまだー！」

(ドッ)

藻

「ぐふっ！」

.....
「まだまだー！」

英子

「しっくいー！」

藻

「がはあああ！」

ああ、今度こそ終わったな……

藻

「くっ……まだまだ……」

(ドサッ)

神

「勝者英子！」

英子

「しっこかったですわ……」

カリナ

「何であんなに耐えるのかしら？」

雄馬

「敗色濃厚やのになあ……」

みんな酷いぜ

守

「…………あばら五本ぐらい折れてるな…
『ケア ガ』！」

藻

「…………鬱だ…………」

カリナ

「あら？聞こえてたの？
ゴキブリなみの生命力ね」

雄馬

「ネズミみたいにすばしっこかったなあ」

神

「お前ウザイからしばらくねてる」

藻

「うわ……………ん…！」

全員

「…………泣くなよ鬱陶しい……………」

藻

「酷い！？
『瞬速』！」

神

「あ、どっか行きやがった
守よろしく」

守

「『次元斬』(ガシッ)」

(ズルッ)

藻

「H A N A S E ! !」

神

「次、藻VS雄馬」

藻

「イジメだ〜〜!!」

第十二話 修行という名のイジメ（後書き）

書き方のアンケートです

- 1、地の文増やしてセリフの上の名前あり
- 2、地の文増やして名前なし
- 3、地の文少なめで名前なし
- 4、地の文少なめで名前あり

何日か待って投票が無ければ2にします
他の小説ではそれが多いため

第十三話 あっはっはやりすぎた？BY神（前書き）

し、死ぬかと思った…

もっぴーでん麺は食わん！

第十三話 あっはっはやりすぎた？BY神

神

「じゃ早速はじめろー！」

藻

「ちよっ…いくら話みたいでるからうってきつい…」

神

「うん、わざと

試合開始！」

藻

「ちよ〜〜〜〜〜！！」

雄馬

(スッ)

拳銃？

雄馬

「『アクアバレット』！」

水の弾！？

あの拳銃はそのためか…

藻

「ちよっ、まつ！」

Aaaaaaaa！！」

雄馬

「勝負に待ったは無しだぜ？」

藻

「そんなん言っつんやったら…」

神の使いと恐れられし聖獣よ！

我の力となり敵を殲滅せよ！

『サンダー・ユニコーン』！」

（ヒイーン！）

（バリバリバリバリ！）

雄馬

「雷なら吸収できる

『トルネイブ』！さらに『アイアン・ウォール』！」

（バババババ！）

（ドツゴオオオ！）

雄馬

「な！？

がああああ！！」

（ガクッ）

藻

「サンダー・ユニコーンの雷は全てを粉碎する

例え水や鉄でもや」

雄馬

「ぐ…うう…」

藻

「これで終わりや！

『ウインドカッター』！」

雄馬

「なめんじゃねえ！！

『グランドシールド』！」

（ガガガガガ！）

何か実況挟めねえ…

順番に説明すると

藻は雷を纏った角付きの馬ユニコーンを出してそいつに雷を撃たせた

雄馬はそれを防ぐために

水の竜巻を作り出し念の為鉄の壁を作り出した

しかし雷はその二つをいとも容易く突破し雄馬に大ダメージを与えた
で、藻がとどめを刺そうと風の斬撃を飛ばしたが

雄馬は土の壁で防いだ、と

守

「凄い攻防だな…」

カリナ

「私の時は本気じゃなかったのかしら…」

英子

「あたしたちの時より動きがいいわよね」

神

「やっぱ女が相手だとやりづらいのかな？」

雄馬

「この程度で終わるかよ……」

藻

「終わるとは思ってたない」

雄馬

「いい度胸だ……」

ならこれでもくらえ！

『ウォーター・マシンガン』！

藻

「パクんじゃ……ねえ！」

雄馬は水を凄く大量に勢いで発射

藻はそれを全てそらした

おそらく風の魔法だろう

二人とも魔法の特徴を掴んでるな

雄馬

「次で決める！」

藻

「俺も限界や

次で決めよう」

雄馬

「すべての守る鉄壁の大地
すべてを破壊し尽くす水
その二つが合わされば
何ものも寄せ付けない恐怖となる」

藻

「風は全てを切り刻み
雷は全てを打ち砕く
それら二つが合わさる時
絶対的な破壊が訪れる」

英子

「まさか！」

カリナ

「合成魔法！？」

守

「二人とも使えるのか！？」

神

「こんだけ強けりゃあ心配しなくてもよかつたかな？」

雄馬・藻

「「最終魔法！！」」

雄馬

「『岩壁水破』!!」

藻

「『風雷絶破』!!」

(ズドドドドドドドドドド!)

(ドツガアアアア!!)

雄馬・藻

「『がぁぁぁぁぁ!!』」

・

・

・

守

「みんな大丈夫か？」

カリナ

「何とか…」

英子

「二、三個岩が飛んできましたわ!」

守

「よく無事だったな…」

英子

「すぐ回復しましたしね」

守

「ああ、そうか…
そういえば二人は!？」

神

「二人とも完全にのびてるよ」

守

「じゃあ結果は…」

神

「引き分けだな
それより回復してやれ」

守

「あ、ああ…
『ベホマズ』」

雄馬

「う…ああ…あれ勝負は？」

藻

「ん…あれ？勝負は？」

守

「引き分けだ」

雄馬

「そっか…ざんねんやわあ…」

藻

「無理あるって…
三連戦やし…」

神

「はい、じゃあくじ引き」

カリナ

「もうちょっと待ったら？」

神

「急ぎのようなんだよ
よって！

何が出るかな 何が出るかな じゃん！
守VS」

守

「俺か」

神

「藻」

藻

「ちよお待てやああ！！
何で俺ばかり！？
いじめ！？いじめか！？」

神

「厳正なるくじ引き（藻のやつだけ端っこ折れてる）の結果だ！」

藻

「今物凄く不正してるように感じたんやけど…」

神

「気のせいだ！
じゃ準備して！」

藻

「ばつくれんじゃねええ！！！」

守

「早くやるうぜ？」

神

「じゃ試合開始（笑）」

藻

「ちくしょー！」

風は全てを切り刻み

雷は全てを打ち砕く

それら二つが合わさる時

絶対的な破壊が訪れる

『風雷絶破』！！』

カリナ

「いきなり！？」

神

「あいつも限界なんだろ」

守

「甘い！甘過ぎる！」

「メープルシロップの十倍甘（ドッガアアアア！！）」

カリナ

「キヤアアアア！」

英子

「直撃！？

守ちゃん！！」

守

「何？」

カリナ

「キヤアアアア！ゾンビイイイ！！」

守

「失礼な！」

藻

「あの距離から避けた…？」

守

「次元斬で避けた」

藻

「それ何てチート？」

守

「じゃあ休め

『死の旋律』」

(キイイイイイイイ！)

カリナ

「何っ!？」

「この音!？」

神

「聞いた者を死に至らしめる音だな」

カリナ

「じゃ耳ふさがなきや」

英子

「冷静ね」

カリナ

「あなたもね」

英子

「慣れたもの」

カリナ

「あたしもよ」

藻

「ぐ!」

あああああああ！！」

守

「休め

お前はこれで戦う事はない」

藻

「じゃこの音止め……！！」

（がくっ）

（どさっ）

神

「勝者守」

守

「さてと

（ぷちっ）（品種改良

『世界樹の』」

藻

「……………」

守

「あり？

心臓、止まっている

息、止まっている

瞳孔、反応なし

やべえ生き返らねえ……」

カリナ

「ええ!？」

英子

「どつするんですの?」

神

「仕方ない俺がやるか」

守

「やれるなら最初からやってほしかった」

神

「神の楽しい蘇生術
用意する物

魂一つ、体一つ、神の力一人分

まず体に神の力を使い魂を入れます

あとは普通の蘇生魔法をかければ生き返ります」

守

「で、それを俺にやれと?」

神

「そついつと」

守

「はあ…」

『げんき かたま』

藻

「俺はポケ ンか？」

守

「まあ生き返ったからいいじゃん」

藻

「もういい…」

疲れた…

部屋戻って寝る…」

カリナ

「行っちゃった…」

神

「まあいいんじゃないの？」

もうあいつ全員とやったし」

守

「にしても何で生き返らなかったんだ？」

神

「極度の疲労で体に限界がきてた」

守

「よつするにお前のせいか」

神

「そういうことみたい

今度から気をつけよう」

第十三話 あっはっはやりすぎた？BY神（後書き）

さてさてリアルの藻に何て言われるかな？

しばらく出番ないしね

キャラクター紹介！ とりあえず第一回（前書き）

やっとキャラクター紹介です
お待たせしましたあ！

キャラクター紹介！ とりあえず第一回

作者

「どーもー作者でーす」

守

「いきなりキャラ紹介ってどうしたの？」

作者

「実は『霊亀』さんにご指摘されて
急遽！行うことにしたのですー！」

守

「指摘されねえと出来ねえのか？
アスペルガーが！」

作者

「アスペルガー症候群は関係ねえだろ！」

守

「でも一応そーいう障害だろ？」

作者

「でもそのせいにしたくないんだよね」

守

「なら指摘されないように精進しろ」

作者

「うん頑張る」

守

「やけに素直だな」

作者

「だって初の感想だったし
来た瞬間返信したよ」

守

「不気味だな」

作者

「うるへあ！

とりあえず登場順な」

名前

綾野 守 (あやの まもる)

年齢

15

身長

165

体重

60

見た目

ワンピースのボア・ハンツク(顔のみ)

髪

ワンスのルイみたいな感じ

目

黒

好きな物

もこもこした物（主に動物）

嫌いな物

勉強、差別

嫌いな人

動物をいじめる人、集団の女子高生、ゆっくりしてる時間を壊す人

特徴

女顔で声が高くよく女性に間違われる

性格はめんどくさいことは嫌いでやりたいことはやる

ド直球のO型

作者

「このぐらいかな？」

守

「半分ぐらいお前と一緒にじゃねえか！」

作者

「共通のトラウマもあるぞ？」

守

「言つな」

作者

「プールで女「わーわー！」わかったよ」

守

「登場した順だろ？
じゃあ」

神

「俺だあああ！！！」

守

「うつせえアホ神！」

作者

「じゃ早速、どぞ！」

名前

神（かみ）

年齢

約二億

身長、体重、見た目、
変わる

好きな物

自由、ゲーム

嫌いな物

不自由、仕事

嫌いな人

仕事を増やす人、先輩の神々

特徴

見た目は基本ファンタシースタ ポータブルのワイナル

性格は自由奔放

よく他の神から仕事をやれと言われるがやる気のないダメな神である
幾つかの世界をコントロールしており守の世界やカリナの世界もその一つ

考えてるのか考えてないのかわからない奴

神

「作者、来い」

作者

「あ、死亡フラグ立てちゃった？
逝ってきまーす」

守

「逝って来い
さて次は」

カリナ

「あたし？」

???

「いや

俺達だ！」

守

「「誰？」」

????

「最初に出てきた盗賊だ！
じゃ紹介行ってみよう！」

名前

盗賊

多分もう出番はない

盗賊

「はあああ！？」

守

「うわっ…かわいいそっ…」

盗賊

「ちくしょー！」

カリナ

「行っちゃった…」

守

「あれはキャラなのか？」

カリナ

「とりあえず次あたしね」

名前

カリナ・イアハート

年齢

14

身長

156

体重

殴るよ？

見た目

エヴァンゲリ ンのアカ

髪

まんま

目

上に同じ

好きな物

ハッキリした物

嫌いな物

微妙な動きをする物（壊れた自動ドアとか）

嫌いな人

ハッキリしない人

特徴

見た目はまんまアス

性格は スカにクールと毒舌たしてニで割った感じ
多分これみてイライラしてる

カリナ

「…分かってるなら…」

守

「か、カリナ？」

カリナ

「ハッキリしなさいよ！クソ作者！」

????

「まあまあ落ち着いて」

守

「誰？」

????

「スタッフさんでわかるかしら？」

守

「ああ、あの時の
キャラなの？」

同じような人いたけど？」

スタッフさん

「あの時の看護婦も私です」

守

「マジですか!？」

スタッフさん

「はい」

守

「ビックリだ…」

とりあえずどつぞ

名前

シエリア・ミリー

年齢

22

身長

167

体重

秘密

見た目

チヨコツ ランドの案内嬢

髪

まんま

目

上に同じ

好きな物

拷問器具

嫌いな物

騒音

嫌いな人

物分かりの悪い人、騒がしい人

特徴

見た目はおとなしそうにみえるが

性格はO H A N A S I大好きな性格

暗器を使える

実は守よりチート

実は冒険者登録していてそのランクが…

シエリア

「ランクが…何ですか？

SSですよ？」

守

「あなたはチート？」

シエリア

「れっきとした一般人ですよ？」

守

「いやいや！」

一般人がSSランク？

あり得ないですよ!？」

シエリア

「気にしたら負けです

とにかく名前がでてよかったです」

守

「そ、そうっすか…

えーと…

次は雄馬かな？」

雄馬

「そっやで

じゃあ早速どうぞ!」

名前

学野 雄馬 (まなびや ゆうま)

年齢

15

身長

172

体重

58

見た目
めだかボ クスの 向

髪・目

上記の通り

好きな物

実験、勉強

嫌いな物

勉強

嫌いな人

実験を邪魔する人

特徴

見た目まんま曰 です

性格はまあ真面目？

でもノリはいい

初登場の時と性格や名前の字が違うのは作者のミス
すんませんっしたあ！！

雄馬

「とりあえず作者どこ？」

守

「さつき神に連れて行かれた」

作者

「な、何とか生きてた…」

雄馬

「ちよつつと来よか？」

作者

「ああ、次は死ぬな…」

もう一回逝って来ます」

守

「うん逝って来い

さて次は…

別にいいか」

藻

「よくない！

ちゃんと紹介しろやあああ！！」

守

「じゃさっさと終わらせるよ？」

藻

「ひでえ…」

名前

藻（も）

まりもというユーザーネームで小説書いてます！

S y u r aのマイページのお気に入りから飛んでね

年齢

13

身長

156

体重

50

見た目

サザエ んのかつ +メガネ

髪

まんまか お(笑)

目

細い

好きな物

遊戯王、ゲーム等々

嫌いな物

勉強

嫌いな人

なおき(リア友)

弟

うざいババア

特徴

見た目はかつ ほど丸くはない

性格はめんどくさがりで好きな物はとことんやる
とにかくよく喋る
電車の中で女子高生並に声でかい

藻

「作者あああー!」

守

「あっち逝ってる」

藻

「ぶち殺す!」

守

「ああ、行っちゃった…」

さて次は…」

英子

「守ちゃん?何してますの?」

守

「A a a a a a a a a a!」

英子

「ふふふ、お着替えタイム」

名前

英子 (えいこ)

年齢

17

身長

140

体重

40

見た目

ゴスロリ

好きな物

かわいい物

嫌いな物

かわいくない物

嫌いな人

邪魔な人

特徴

いわゆるロリ体型

あと腐女子

趣味は守を着せかえること

時々襲うが毎回誰かに止められる

英子

「これでOKですわ」

守

「もういやだ…」

英子

「はあ… はあ…」

「守ちゃんかわいい…」

「お持ち帰り〜」

作者

「Aaaaaa！！」

(ゴンッ)

英子

「痛いすわー！」

藻

「おい作者」

雄馬

「まだ話は」

シエリア

「終わってないですよ？」

作者

「何でシエリアが参加してるの？」

シエリア

「面白そうだからです」

作者

「理不尽だ…」

英子

「私も参加していいですか？」

藻・雄馬・シエリア

「『どーぞどーぞ』」

作者

「Aaaaaaaa!」

守

「作者も災難だな…」

キャラクター紹介！ とりあえず第一回（後書き）

この後もキャラが増えればまたやります

第十四話 作者乱入！（前書き）

タイトル？まんまです！

第十四話 作者乱入！

神

「じゃ取りあえず……
くじ引きタイム！」

守

「その前に」

神

「何？」

俺の楽しみを奪うと殺すよ？」

守

「いや、そうじゃなくて……
あれ……」

神

「あれ？あれって……
もしかして……あれって……」

守

「作者……だよな？」

作者

「生みの親の顔を忘れたかー！ー！」

守

「いや、何出てんの！？」

今本編だぞ!？」

作者

「いや、それには深い訳が…」

守

「どんな訳だ？」

作者

「通学途中の暇潰し」

カリナ

「あんたバカ？」

「いつぺん死ねば？」

作者

「そんな事言うなよ」

守

「でも、本編出て大丈夫か？」

作者

「大丈夫だ、問題ない」

守

「あるわあああ!!」

まず他の作品のネタバレクンな!!

他の作品のキャラのセリフパクンな!!

もうちょい描写を増やせええ!!」

作者

「分かったよじゃまず」

ここは守達が冒険者登録した村の近くの森の中のボロボロの舞台の
あった場所にある瓦礫の上に立っている

守

「長い！細かい！読むの疲れるわ！
地の文までネタ盛り込むな！」

作者

「でもあつてるよね？
君らが壊した舞台の瓦礫だよね？」

守

「そついう事言ってるじゃねえ！
取りあえず帰れ！『次元斬』！」

作者

「だか断る！」

守

「じゃあ仕方がないな
シェーリアさん！」

作者

「な！？
ちよっ！やめて！死ぬから死ぬから」

シェリア

「少しは心配をしてやれよ」

神

「大丈夫！非殺傷設定のはずだから！」

守

「はずかよー！」

神

「じゃとりあえず

そおいつ！」

くじ引くのに気合い入れすぎだろ…

神

「守VSカリナ！」

カリナ

「あゝよかった空気になるとこだった」

雄馬

「わいの方が空気やで？」

今回の出番これが初やし」

カリナ

「そういえばそうね

喋らないから忘れてた」

雄馬

「Illoriz」

『アイス・ファイア』！

守

「な!？」

詠唱なしで合成魔法!?

守

「くっ! 『ドレイン』!」

(バチバチ)

守

「吸収しきれない!？」

(ドツガアアア!)

カリナ

「簡単に勝てると思わないでよ!

『アイス・ファイア』!」

守

「あゝ、いつてえ…

ん? A a a a a a a a a a!？」

(ドツガアアア!!)

カリナ

「直撃

終わりね!」

守

「『シャドー・クローン』 あれは分身だ」

カリナ

「な!？」

守

「『ドラキュール』!」

カリナ

「『アイス・シールド』!」

守

「『キャンセル』!」

カリナ

「魔法向こう!？」

守

「は!」

(ブン)

カリナ

「遅いわよ!」

そのぐらいなら簡単に避けられるわ!

『プロミネンス』! 『アイシクル』! 二つを合わせて……!」

溶岩と氷が混ざっていく!?

カリナ

「『オーバーゴッド・クラッシャー』」

守・神

「ちよつ!? 当たる当たる当た(ギユウウウン!) A a a a a a a a a!?!」

カリナ

「あ、神にも当たっちゃった…」

ま、いつか!」

神

「よくねえ!

俺が死んだら何千概の命が死ぬと思ってんだ!」

カリナ

「あれ? そうなの?

でもあをたなら大丈夫でしょ?」

神

「名前がグロいわ!!」

本気でくらったわ!

マジで神の力越えてんじゃねえよ!」

守

「ふう… 助かった…」

神

「よく避けれたな

俺でも無理だったのに」

守

「いや当たった

でも直撃は免れたし

お前等がコントしてる間に十分回復出来た」

カリナ

「じゃあ隙を与えず…攻撃するのみ！

『アイス・ファイア』！『アイス・ファイア』！『アイス・ファイ

ア』！『アイス（以降エンドレス）」

守

「な！？ちよつ！？まつ！？危つ！ないっ！なるお…！『キャンセ

ル』！『キャンセル』！『キャンセル』！（以降エンドレス）」

神

「あいつ等魔力に限界ないから永遠にあれやってるんじゃないか？」

雄馬

「いや…そのうちどっちかが乱れると思うぞ？」

神

「いや…これなら別に心配要らないな

本当に

これ終わったらさっさとやらせるか…」

雄馬

「どっしりどっしりとっ」

神

「いや、実はかくかくしかじかで…」

雄馬

「ああ、なるほど」

あつちは何やってんだ？

にしても埒があかねえ！

でも一つ一つ『メドロ ア』位の威力あるし

接近できるほど余裕はないし

避けるのは無理そうだし…

あ、そうだ！

守

「『次元幽閉門』！

開門！」

(ズオオオオ！)

カリナ

「な！？

そんな物壊してやるわ！」

よし！

今のうちに

守

「『次元斬』」

カリナ

「なかなか壊れないわね……」

守

「何やってんの？」

カリナ

「何ってあれを壊そうと……!?!?」

守

「お疲れさん(トンシ)」

カリナ

「あ!……(ドサッ)」

神

「勝者守」

シエリア

「ふう……終わりましたよ」

作者

「……………」

守

「じゃ、送り返すか

『次元斬』」

神

「騒がしい奴だったな」

雄馬

「ほんまやわ」

みんなひどいな…

まあ確かにうるさかったな…

(ポイツ)

守

「さて作者も返したことだし
次の試合をしようじゃないか!」

カリナ

「今投げたわよね?」

雄馬

「ボロボロやったんやで?」

守

「まあ、大丈夫だろ!

それよりさっさと試合を…」

神

「その必要はない」

守

「なぜえ?」

神

「今回の模擬戦はかくしかじかのためなんだ」

守

「かくしかじか？」

カリナ

「なるほどね」

え？

英子

「分かりましたわ」

もしかしてわからないの俺だけ？
つてか英子いたんだ？

藻

「まあ、わかった」

いつからいたの？

よし！まりもに昇格しよう！

おめでとう！

じゃ無くて

守

「もうちょい具体的に……」

神

「は？そこはご都合主義だろ」

まあいいだから……………で……………と

……が……だから……っ
て訳だ
わかったか？」

守

「ようするに

お前の友達の世界で鬼って奴が増えすぎて世界が壊れそうだから減
らせて事だろ？」

神

「減らすって言うかぶっちやけ絶滅させてくれ」

カリナ

「物騒な話ね……」

雄馬

「それより何でその友達は何もせえへんのや？
一応神様なんやろ？」

神

「神になりたてで力をうまく使えないんだ
しかも鬼はあいつの全ての世界の中で最強の種族だ
太刀打ちできないんだ」

雄馬

「じゃあ英子は？」

神

「一人で太刀打ち出来るわけがない
それに、強い生物を作るのは異常なまでに時間がかかる

作り出してる間に滅んでしまう」

雄馬

「じゃあ俺等みたいに強くするのは？」

神

「かなり神力の扱いに馴れないと無理だ
俺ですら出来るようになったの100年前だぞ？」

雄馬

「それは早いんか？」

神

「早い普通は三億年はかかる」

雄馬

「たしか約二億歳やったよな？」

神

「そうだよ」

俺はかなり才能あったからこれだけ早いんだ
でもあいつは才能はあるけどまだ五千五百七十四歳だ」

守

「十分生きてるじゃん……」

神

「神の世界では人間の十歳位だ」

若っ!?

雄馬

「なるほどな

そりゃ行かなあかな」

守

「内容全部覚えたの？」

雄馬

「そつやで？」

「当たり前やん！」

守

「内容全部覚えてる人いる？」

(しゅん…)

守

「当たり前じゃなかったな」

雄馬

「何でやる？」

「脳の出来が違うんだよ！

そういえば頭よかったな

そんな感じで明日あたり早速行くことになった

第十四話 作者乱入！（後書き）

初の3000文字いったあああ！

後さつきみたらユニークが600いってました！

皆さんありがとう！

1000いったら番外編だな

第十五話 あっはっは突撃www(前書き)

思いつきで書いてるから内容だいたいしか覚えてない…
ま！いいか！

第十五話 あっはっは突撃WWW

神

「とりあえず藻を呼んでこい」

守

「あ、作者が書きづらいからまりもにするらしい」

神

「じゃまりも呼んでこい」

守

「イエッサー」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

まりも

「H A N A S E !」

雄馬

「往生際悪いよ?」

まりも

「俺は新しいデッキを作るんだー!」

神

「しゅるちゃーい」(トント) (ミッシ)

まりも
「うっっ……………」

見事な手刀だな
見えなかった
え？場所？

前回と同じ場所

神
「じゃいつてこい！
えーと

2746980524238mtpw412367tggadm7
4236980でいいのかな？

……………うんOK！
『ワープホール』
改めて逝って来い！」

守
「字が違「ドーン」Aaaaaaaa!」

神
「さぁおまえ等も！」

全員
「…………断る!」

神
「…………でも、ドーン」

全員

「……A a a a a a a a a a ! !

覚えてやがれ(なさいよ) ! ! ! ! !

神

「あつはつは!

俺知ーらね!

・

・

・

(トサトサトサ!)

守

「いって…」

雄馬

「ここどこやる?」

カリナ

「まあ、知らない場所なのは確かね」

まりも

「え? いやいやどう見てもただの海岸やる」

まあまりもの言うことも、もっともだ…

確かにただの海岸だ

砂浜があつて

まあまあ綺麗な海があつて

海藻がうちあがってて
後ろが森……は、普通かな？
でも

守

「トゲトゲ巨大蟹は普通なのか？」

まりも以外

「「絶対普通じゃない」「」

まりも

「え？（バチン）どこに巨大蟹がいるんだ？」

こいつ雷で全部消し炭にしやがった…

カリナ

「炭も普通じゃないと思う」

まりも

「そんなもの（ビュウッ）どこにある？」

今度は風か…

雄馬

「じゃああれは？」

あれ？

あれって…

あのガノト スもどき？

風で無理やり…

英子

「木が動いて」

まりも

「だから（ババババ）どこに（ビュウッ）あるんだあああ！」

雷で消し炭に

風で炭を飛ばす

ついでに土も戻す。

で、まりもはもう倒れそうになってる

まりも

「さあ、これで普通の「こっちから蟹の丸焼きが」もう、無理」

巨大蟹の丸焼きを大量に担いだ男（同い年位）
と

????

「あら？人がいるわね」

でっかい熊（さっきの奴と同じ奴）を担いだ女（同い年位）がやっ
てきた

雄馬

「どちさんでっ…」

????

「俺はジエイ！」

こいつはミリー！

こっちからこの蟹が飛んできたんだけど何か知らないか？」

全員

「「「こいつがやりました」「」」

いつのまにか倒れてたまりもを全員で指差した

まりも

「何か、ひどい…」

雄馬

「やったんほんまやろ？」

カリナ

「勝手に暴れたのあんたでしょ？」

英子

「全部海に捨てましたわよね？」

守

「後でちゃんと掃除しろよ？」

まりも

「み、味方がいない…（ガクッ）」

ジエイ

「そうなのか」

ミリー

「いやいや、やりすぎでしょ」ねは…」

守

「家のバカがすみません」

ジエイ

「いやいやちょうどよかったよ」

守

「え？」

ジエイ

「こいつらは数年前に見つかった鬼だ」

「この頃こいつらが増えすぎて困ってたんだ」

雄馬

「ああ、なるほど」

「こいつらが」

ミリー

「おかげで討伐隊まで組んで倒そうとしてんのよ？」

ジエイ

「しかもこの国は男が少ないから討伐隊の男は俺一人なんだよ」

カリナ

「大変ね」

「よければ手伝っわよ？」

ミリー

「ほんとに!？」

よかった!この頃量が多くて困ってたの!」

英子

「おやすいご用ですわ!」

ジエイ

「でも危険だぞ？」

そこの彼ぐらい強くないと」

全員

「「「「こいつ?一番弱いよ」「」「」

まりも

「お前等死んじまえ!」

うわ~~~~ん!」(バシャバシャバシャ)

ミリー

「海には鬼が大量にいるわよ?」

(ギユアアア!)

ミリー

「ほら出てきた!」

早くこつちに来なさい!」

まりも

「こんなもん(バババババ)アバババババ!？」

((シュー…))

全員

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

まりも

「今酷いこと考えなかった？」

復活早いな…

全員

「ソナコトナイデスヨ？」

まりも

「うわ~~~~ん！」

（ギユアアア！）

まりも

「邪魔なんだ（ババババ）よおおおおお！？」

守

「学習能力無っ！？」

カリナ

「あまりにショックで忘れたのかしら…」

英子

「素で忘れたのかもしれないわよ？」

雄馬

「まあどっちにしろ」

異世界組

「……バツカじゃねえの」「……」

まりも

「……………」(ザバアン)

守

「あ、本気で泣いてる」

カリナ

「やりすぎたかしら？」

英子

「そんなことありませんわ」

雄馬

「まあまりもやし」

まりも

「ほんとに何！？」

マジで何！？

訴えれば勝てるレベルじゃね！？」

ジエイ

「仲がいいんだな！」

まりも

「んなわけ、あるか！

『サンダー・ユニコーン』！」

(ヒイイイン！)

(ババババババ)

異世界組・守

「守、よろしく」「」

守

「『強制脱出！』」

(シユン)

説明！

『強制脱出！』は！マークも含めて技名である

効果は、召喚獣のように違う場所から出てきたものを元の場所に戻す
だ

まりも

「もう帰りたい……」

守

「じゃ帰してやる『次元斬』

さっ入れ」

まりも

「もしかして元いた世界？」

守

「そつだぞ？」

まりも

「嫌だー！？さっきの世界にしてくれ！」

守

「うん、それ無理

はい、ドーン」

まりも

「A a a a a a a a a a a a ! !」

まりもさんが退室しました

雄馬

「ほんまに強制やったな」

カリナ

「あいつ どうすんの？」

守

「必要なときに呼ぶ」

英子

「能力はどうなるんですの？」

守

「向こうにいる間封印すればいいんじゃないね？」

雄馬

「したんか？」

守

「あ、『次元斬』「おお早速」『アビリティ・ロック』「死ね！あれ？魔法使われへん！」封印したじゃな「ちよっ！？まっ！？」（バン）ふう」

雄馬

「閉まるときそんな音するんや……」

カリナ

「なんかしょうじみたいね」

守

「かなり強く閉めたからな
普通は鳴らない」

ジエイ

「終わった？」

異世界組

（（（（（すっかり忘れてた！）））））

守

「うん、終わった」

ミリー

「転移魔法なんて使えるのね
頼もしいわ」

守

「ぞーっす」

ジエイ

「じゃあ城に案内するよ!」

ミリー

「こっちよ」

この世界の住人ジエイとミリー

この二人に会った異世界組ははたして世界を救う事は出来るのか

まりも

「もしかしてもう出番ないの?」

作者

「今のところな!」

まりも

「いっぺん殴らせろおお!」

第十五話 あっはっは突撃WWW（後書き）

あっはっは！

こりゃまた苦情くるな！

ギャグキヤラなんだから仕方がないじゃないか！

第十六話 新たな仲間が個性が凄い！（前書き）

書き方変えました

アンケートも終了です

一票も来なかった…

第十六話 新たな仲間が個性が凄い！

「お前達はジエイ達と同じ隊に入ってくれ
頼んだぞ」

はい

今、王様の前に居ます
何か色々あって隊に入ることになったんだ

「分かりました」

「詳しい話はアリアから聞いてくれ」

王様は何か軽そうだが
よく保つな

つて言うか本当に王様とジエイ以外男の人見なかったな

「ほらさっさと行くわよ」

ミリーはカリナと口調が同じだからいきなりだと分かりにくい

「こっちだぜ」

さてさて移動しますか

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「さあ！」

ここが俺達、イーグルスの部屋だ！」

イーグルスって思いつきり厨二臭いっすね

「さあ！入って入^{ガチャ}」A a a a a a a a！」「いい声ですねぇ、もっと聞かせて下さい」「ギブっす！無理っす！」「(ボタン)……」

「い、今のは？」

「うちの隊長のARIA(やってた人)と新人のネル(A a a a a a a a！)って言ってた人」だ」

こっちにもシエリアさんみたいな人がいるとは……
まりもを盾にするために常に魔力を集中しよう

「ほんま

個性豊かな人が多いなあ
楽しくなりそうやな」

「そうね

暇は無さそうね」

そういう問題ですか？

(ピッピシッ)

ん？空間に切れ目が……

「よっし！着いた！

あ！守！」

騒がしい…

まりもか…

おかしいな？

完璧に能力を封印したはずなのに

っていうかあいつに次元移動は出来ないはずだ

おっかしいな？

「リアル俺に飛ばしてもらった

ついでにスキルもゲットだぜ！

じゃ、早速

死ね！『デリート』！」

「デコンマンドメンツ
T・C・M

『ルーンセ ブ』

アホは引っ込んでろ！」（ザシユッ）

「がっ！？」

「剣で斬った！？」

「仲間じゃないの！？」

「だが俺は死な、ん？

斬れてない？」

「『ルー セイブ』は斬れない物を斬る剣だ

さらに封印も出来る

お前の魔力を封印した

ついでにスキルも封印した」

「なんてこつたい！」

「後お前危険だから帰れ」

「だが断る！」

「拒否権なぞ無い！」

さよ（がしっ）おな（ガパ）ら（ぶん）もつくんな

「A a a a a a a a ! ! !」

まずは掴んで

次元斬（片手で）やって

放り込む（腕を光の魔法で強化してる）

まりもが叫ぶ

「スツキリ！」

さてさて中に入ろうか…

皆さん視線が痛いですよ？

「強制か…なんかかわいそうね…」

「もう少し優しくしてあげては？」

でもあいつは俺を殺そうと（本気と書いてマジ）してたんだぜ？

正当防衛&未然防止の両方をしただけさ！

「まあ、正当防衛っちゃ正当防衛やな

やらんかったらやられてたん守やし」

おお！さすがは雄馬！

話分かる！

「まあ、ちょっとやりすぎやけど…」

o r z

なんだよ…首つかんでポイして強制送還しただけじゃん…

あ、首つかんじやってた

まあ大丈夫だろ

まりもだし

「……………アリアさん、新人が…」

ん？只今説明中？

さつきみた感じではシエリアさんみたいだったけど大丈夫かな？

「ん？新人なら今絞めましたよ？」

「あ……………」

うめき声が聞こえる…

やっぱりあいつを盾にしなきゃ死ぬかもしれない…

頑張れ俺！

「そうじゃなくて

新しく入るんです！」

「え？そうなんですか？

なら入って下さい」

「失礼します」

そついやここ派手だよな…

廊下にでかいシャンデリア

部屋にはさらにでかいシャンデリア

王様の部屋はかなりでかかったな

いくらぐらいするんだろう？

「アリア隊長こちらが新しく入った

カリナ、エイコ、ユウマ、マモルです」

ん？なんか見たことあるな…

ああ、テ ルズの嫌みメガネだ

超そつくり、違うの声の高さぐらいだ

「どうも私がイーグルスの隊長、アリアです
よろしく」

取りあえず新人には必ず言うことがあります」

死ぬとかかな？

「私を守りなさい」

予想の斜め上を行った！？

なんか色々とすごい人だ…

「じゃあみんなも自己紹介を」

「ジエイ・ローガンだ！

「ジエイって呼んでくれ！」

「ミリー・ナールよ

ミリーって呼んで」

「……………」

「どうしたんですか？
早くしなさい」

「ね、ネル・マーフィッス…
ネルって呼んでください…ッス」（ボタン）

本当に個性豊かだな
バカとツンデレと語尾が「ッス」になってるやつ（男、女、女）
自己紹介で性格までわかった

「じゃあ取りあえず皆さんの力量を計ろうと思います」

「どつやるんや？」

「窓から闘技場が見えるでしょう？
あそこで現メンバー对新メンバーをやるんですよ」

「……………直ぐに勝負がついちゃうよ」「……………」

「……………絶対負けないじゃん」「……………」

「……………一人でも勝てるよ」「……………」

「「「「「ああ！？やんのかゴルア！！」「」「」「」

「とにかく準備して20分後闘技場に集合ですよ」

（（（（（絶対負けねえ！）））））

しばらくして準備が終わり

作戦会議が行われた（約10分）

そして全員闘技場に向かった

「皆さんそろいましたね？

じゃあ早速始めますか！」

闘技場は真ん中にスタジアムがあり

その周りを取り囲むように観客席があった

「では」

その中央で向かい合い

「試合」

武器を構え

「開始！」

開始の合図と共に魔法が飛び交い、剣が交じりあった

（ドオオオン！！）

そして爆音と共に試合は一瞬で勝敗が決した

「…………あれ？みんなどこにいったんです？」

唯一開始と共に後ろに飛んだアリアさんだけが残っていた
他の全員は

(ガラガラ) (ドサ)

壁にめり込んでいた

第十六話 新たな仲間が個性が凄い！（後書き）

アリアさんも爆風はくらってますよ？

でも吹っ飛びませんでした

最強キャラって必要だと思っ

番外編 守の新技と雑談(前書き)

書き方変えようか迷ってるんですけどよねえ…
一回変えてみましょうか？

番外編 守の新技と雑談

「さてさてどうしようかな？」

みなさんこんにちは例のごとく守です
今俺は自分で作った異空間にいます

「取りあえず新技考えるか…」

「そうしろ」

「普通に出てくんな作者」

「番外編だしいいんじゃないかね？」

「そういう問題か？」

「てか本編にも出てるだろ」

「全てを超越する！」

「それが作者という存在だ！」

「ふざけなくていいから」

「わかったよ」

「にしても殺風景というかなんというか」

「うるせえてめえは黙ってる！」

「闇サトシWWW」

「でも殺風景すぎかな？」

「うん

あいて以外真っ黒っていうか何も無いのはちょっとあれだね」

「じゃ、どうしよ？」

「任せろ

作者に限界などない

えっと…ちよちよいのちよいと

(ブワッ)

一瞬で暗い闇は消え

綺麗な世界が広がった

「でも見たことあるような…」

「スマブ のハラルにしてみました」

「ただの壊れた神殿が空に浮いてるだけだけどな」

「うるへえや！

取りあえず

某魔王の魔砲をやってみよう」

「どじやるの？」

「まずドレインの応用で空気中の魔力を一点に集中」

「ここに魔力なんか浮いてんの？」

「作者なめんな

次にそれを一気に前方に撃ち出す
それでできるはずだ」

「えーつと…

魔力を集めて…」（キイイイ…）

「それを（キイイイ）一気に撃ち出す！（チュンッ）」

「……………」

「……………今の何？…」

「わかんないただ分かるのはハイラの半分が消えたって事」

「なんてチート？」

「魔王越えたな」

「……………取りあえず、危ないから使うのはもしもの時にしよう」

「そつだな…

技名は？

色も黒っぽかったし技名付けようぜ」

「そつだな…『ギャラクシーブレイカー』ってのは？」

「それ最高
まさに最強」

「じゃ次だな」

「どうすんの？」

「光の魔法を攻撃特化させてみたい」

「じゃ体を改造して全身から武器を」

「できんの？」

「やればできるよ」

お前に不可能はない！」

「じゃまず『ミニミミ』」

「早速巨大なマシンガンとか鬼畜だな」

「試しうちじゃあああー！！」

（ダダダダダダダダダダダダダダダ！」

「ちょ！？

ドレインシールド！」

（ガガガガガガガガガガガガガガガ！）

「危ねえだろ！

当たったらどうすんだ!」

「治す」

「ですよねえ」

「取りあえず二つ目出来たな」

「じゃ三つ目いってみよう!」

「ひらめいた!」

「何を?」

「ちょっと試させてくれ」

「危くない?」

「痛覚麻痺させるし」

「そこまではではやらん」

「じゃおk、やれ」

「じゃ、お構いなく(ズボ)」

空間と空間を繋ぐ穴を作り出し
そこに手を突っ込む

(ガス)

「ぐはっ！」

空間の出口を相手のやや後ろにだし
相手を殴る

「くっ」

同時に肉体改造で相手に強力な磁力をもたせる（今回はついでに痛
覚を麻痺させた）

「はっ！」

相手の周りに異空間と繋がってる穴をいくつも作り出し（今回は試
すだけなので10箇所）
そこから大量に鉄製の武器を出す

「なっ!?!」

（ドガ！ガス！バキ！ズチヨ）

相手が逃げても磁力で追尾する
弾いても戻ってくる

「……十分…致命…傷」（チーン）

「やりすぎたな

本気出したら大量虐殺出来るな
触れて磁力つけければ勝手にぺちゃんこになってくれる」

敵がいっぱいいるときは使おう

「ん？あ、忘れてた忘れてた
作者死にかけ……死んでる……」

『ザラル』

「死ぬかと思った……」

「いやいや、死んでたよ？」

「じゃお前も半殺しな」

目がマジです

「やめ「D A M A R E！」A a a a a a a a a a！」

ア、アイアンクロウはきついです

「これで済むと思うなよ？」

「え？」

「刹那は無限……」

その一瞬に、我が全てをかける！」「ドン（）ザン、ザン！（）

「ぐ、がはっ！」

「『翔 裂光閃』！」（ズガガガガガガガガガガ）

「ぐばがぐかあばぬくが！」

「くはあ！」

「うむ、流石はユージンの技だ
守が穴だらけ」

(キイイイ…)

「殺す気か！」

「半殺しにする気だ！」

「やりすぎじゃあああ！」

「まあまあ、気にすんな

雑刀らしき物でかなりの回数突かれただけだろ？」

「思いつきり致命傷じゃブオケエ！」

「落ち着けよ

チヨコやるから」

「命がチヨコで足りるのか？」

「俺なら絶対足りない」

「ならそれで交渉するな！」

「はああ！」(キイイイ)

「え？ちよ、ま、何やってんの！？」

「『ギヤラクシーブレイカー』！」

「A a a a a a a a a a ! !」

作者は灰になった

(ゴウ)

その灰から炎が上がり

(ブワツ)

炎の中から作者が出てきた

「何度やられようと、俺は不死鳥のように蘇る！」

「リアルに不死鳥やってんじゃねえよ」

「うるへえ

さっさと、次考えろ」

「考えるのはお前の仕事だろ？」

「このかた考えて書いた事など一度もありません！」

「少しは考えろ！」

「考えてるよ？技名」

「そこだけ？」

「後は適当におこることを設置すれば勝手に進むから
それを書いてただけ」

「要するに見えてはいけないものが見えてると？」

「いや、頭の中に勝手に出てくる」

「名前は？」

「見ての通り」

「だろうな」

「考えてるとは微塵も思えないもんな
英子とか完全に番外の時のAを英にただけだもんな」

「あと、出す予定の新キャラもS子もとい得素子だし」

「活動報告に出てたな」

「そうだ」

「俺にだけSが目覚める訳の分からないキャラだ」

「考えたのはお前だろ？」

「残念ながらまりもだ」

「今度こっちのエリア&拷問器具送りつけてやる！」

「そうかそうか」

「なぜに波？」

「なんとなく 平にしてみた」

「ついでに俺の中ではあの作品は海物語という名に変わっている」

「なんかあれだな」

「怖いものなしってかんじだな」

「だって魚や船や波や貝だけじゃなく魚の卵まで出てるし
まさに海物語じゃん」

「思ってる人はたくさんいると思うけど言っちゃダメだ」

「そついや話がかなりそれてるな」

「ああ、戻さなくちゃ」

「どぞの女子みたいになってる」

「一つの話から三時間話し続けてもはや関係なくなっても話し続けるあれはすごいと思った」

「でも近くでやられると」

「「疲れるな、精神的に」」

「珍しく意見があうな」

「元々性格は俺に近いからな
俺も丸くてモフモフが大好きだ」

「たとえば？」

「うさぎ」

「お前の家11羽いるからな」

「エサ代が俺達家族と同じぐらいなんだ
何羽か貰ってくれ」

「買う場所がない
そしてなぜそうなった？」

「2羽が3羽、3羽が4羽、4羽が7羽、7羽が10羽そして妹が
飼ってる1羽で11羽」

「どれだけ増やすんだ？」

「勝手に増えたんだよ！
しかもちっちゃい1羽のうさぎから8羽だぞ！？
考えられるか！？」

「めっちゃちっちゃいもんな」

「まあ、ネザールランドドワーフだしちっちゃいのは当たり前だけど
(ネザールランドドワーフは世界最小のうさぎでピーターラビットの
モデルになったらしい)産む量が異常」

「さっきの話では回数多かったからな」

「ただ気になることは3羽産んで今いるのは1羽だけなんだけど」

残りの2羽がどこにもいないんだよな」

「……知らない方が幸せかもな……」

「でも母親の口元赤かったからわかった」

「なんか怖い話になってるな……」

「当初の目的が遠ざかっていく……
頑張っ て戻すぞ！」

「おうー！」

「……」

「どうした？」

「文字数が2700いつてる……」

「だが終わるのは許さん！」

「なじえ？」

「読者様が納得しないだろ」

「あ、なるほど」

「じゃ、さっさと考える！」

（20分後）

「……………」

「……………」

「いいアイデアが……」

「ない！」

「こういつ時は！」

「なにすんの？」

「アンケートウ！」

「他力本願すぎだろ！
絶対納得してもらえない！」

「しかもアンケート帰ってきた試しがない」

「むなしっ！」

「うるへえ！」

ラスト一個考えるぞ！

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「はっちゃけた！」

「いきなりなんだ!？」

「いや、いい案が」

「なら普通に言え」

「えっと、ゴニョゴニョ……………」

……………
OK?」

「お前本当にあの人好きだな」

「かつこいいじゃん!」

「で、ゴニョゴニョ使ったって事は」

「本編で!」

「絶対読者減った」

「嘘だあああ!」

おわり

番外編 守の新技と雑談（後書き）

今回は書き方変えてません

なんかやつちやつた感あるな…

今日は時間があまりないので他に更新できるか…

実はこれ昨日投稿する予定だったんですよ

確認画面で切っちゃったんだ

寝ぼけて

A a a a a a a a ! !

第十七話 描写の練習ですBY作者（前書き）

遅れてしまってすみません！

いや〜ちょっとゲーム…ゲフンゲフン！ネタ集めをやってたらこんなことになりました

すみません！反省してます！

石投げないで！

第十七話 描写の練習ですBY作者

「……納得いかねえ！

もう一回だ！」「」「」

「……うっせえ！負け犬！」「」

「てめえ、吹っ飛んでただろ！」

「一番早く立つたし！」

「あんたのびてたじゃない！」

「隊長が残ってたから勝ちツスよ！」

「納得いきませんわ！」

（ギアアギアア！）

只今さっきの一戦が納得いかないので論闘中

1対1なら絶対負けねえ！

「なら1対1はどうです？」

それなら文句は無いですよ」

「……のつた」「」「」「」

「問題は誰が誰と戦うかですね」

じゃあ、全員の希望を

「あたしはミリーがいいわ」

カリナはミリーで

「あたしもね」

ミリーも承諾したため決定

「俺はジエイがいいなあ」

雄馬はジエイか…

「いいぜ！やってやる！」

ジエイが承諾

「なら私はネルと」

「OKッスよ！」

英子はネルと

なら俺は

「アリアさんですか」

「そうなりますねえ」

その日は万全ではない、ということ
で次の日に殺ることになった

誤字にあらず

次の日、また部屋に集まり
戦う場所に向かった

「着きましたよ」

そこは城から10分位歩いた所にある草原だった

周囲に森があり、森の中のステージのようだ

花などはなく、草も短めで周りが森だから涼しい

戦うにはちょうどいい場所だ

「じゃあ早速」

「やるわよ!」

「せっかちですねえ、試合開始」

試合開始と同時に

「はあ!」

2人は間合いを詰めた

「『フレイムダンス』！」

ぶっちやけ炎を纏ったカポエラ

「『猛琥拳』！」

ぶっちやけ正拳突き

ただし早さが尋常じゃない

(ズガン)

2つがぶつかるとすごい音の後

2人は3m位吹っ飛んだが

すぐに体制を立て直した

逆立ち+蹴り+魔法ってかなり難しい

けど簡単そうにやってるカリナもカリナだが

それを正拳突きで跳ね返すミリもミリだ

「なかなかやるわね！」

「あなたこそ！」

「『ファイアーナックル』！」

さらに！『アイスナックル』！」

カリナは右手には炎、左手には氷を纏わせた

「『土竜潜行爪』！」

ミリーは岩で鉤爪を作り出し
両手に装備した

(ダン)

「はあ!！」

(ガギン)

2人は距離を詰め一撃交わした後

「はああああ!！」

(ガガガガガ!)

すごい速度で打ち合いを始めた

「なんや凄いなあ……」

「普通に某漫画の流星拳(片手)位の早さなんだけど…
そしてそれを見て凄いですむ雄馬が凄い」

「照れるわあ」

「褒めてないからね？」

「ついノリで」

雄馬もなかなか染まってきたな
キャラも固まってきたし

え？俺のキャラ分かりにくい？

俺の性格はメタ　ンのごとく変わるのさ！

「『ビッグバンアックス』！」

「『土竜粉碎弾』！」

上に飛び、両手を握りしめ思いつ切り振り下ろしてるカリナと

ラーメンのトッピングが主人公の某漫画の回転しながら暴れまくる
アレみたいな技を繰り出してるミリー

ミリーの説明長すぎたかな？

(ドッ、ガアア)

「『キャラア！』」

(ズガン)

(ドガ)

位置関係でカリナは上に吹っ飛び
ミリーは地面に叩きつけられた

その後上から落ちてきたカリナが地面に頭から……

頭から？

「おい！カリナ！

大丈夫か！？」

「いったあゝい…」

爆風おこしてクッションにしてなかったら死んでたわ…」

よかった…生きてた…

「おい！ミリー！」

ん？ジエイがミリーに駆け寄る

「うゝん…」

「気を失ってますね

よって勝者カリナ！」

「やったあ！」

カリナは小学生みたいに喜んだ

こういう一面があると癒される…

でも…

「ジャンプしすぎだろ…」

やったあ！ノ次の瞬間カリナは消えた

代わりにクレーターがあった

(スタッ)

「ジャンプしすぎちゃった」

「じゃねえよ」

にしても…

「ボロボロすぎだろ…」

せつかくの草原が高野に変わっていた

「任せてください」

「」「」「え？」「」「」

「『巻き戻し』」

アリアさんがそう言ったら

(ギューイイイイ…)

どどん岩などが元の位置に戻り

「すげえ…」

元通りになった
なんてチート？

「今のどうやったんですか？」

「時を巻き戻しただけです」

巻き戻しただけって、かなり難しいですよ？

「さて、フィールドも元通りになったことですし
次の試合始めますか」

「次俺らでいい？」

「早く戦いてえんだよ！」

この2人はバトルジャンキーですか
2人の特徴に追加しておこう

「せっかちですねえ
それでは試合開始」

(ドーン)

「おおおおお！！」

お2人さん、またクレーターができましたよ？
どうするんですか？

(ガスッ)

今何がおこったのでしょうか？

1、俺に岩が当たった

2、アリアさんに岩が当たった

3、両方

正解は…

((後で O H A N A S I だな))

3でした

(ズガン)

お約束のように2人はぶつかり
空高く飛んでいった

「お前も風が操れんのか!？」

「違うな!

俺の足元見てみな!」

そこには薄い岩が

あれで飛ぶってどこの暗殺おじさんだよ…

「喋り方変わってないか?」

「気にすんな!」

(ガガガガガ)

またまたどっかで見たとある光景
2人は落下しながらバトってる

「『蛇殺拳』!」

雄馬は手にまさに毒ですって感じの色の液体を纏った

(シユツ)

(ジユン)

溶けた!?

「酸!?!」

「おらおら!」

避けなきゃ溶けるぜ!?!」

「甘え!『エアプロセツサー』!」

ジエイの腕の周りに風が纏わりついた

「はっ!」

(ザシユ)

「な!?!」

押し負けたのは雄馬
風が毒を退け身を切った

「ぐっ！」（ドサ）

バランスを崩した雄馬は地面に落ちた

「どうした？もう終わりか？」

「なめんじゃ……ねえ！」

『ローズウィップ』！」

雄馬はバラの鞭を作り出し尻払った

「おっと（スカッ）その程度じゃ俺は（グラ）な！？」

寸前で避けたはずのジェイは膝をついた

「先に目に見えないように毒針を仕込んでおいた
薬は即効性、10分は動けない」

勝負ありだな

「ちくしょう！」

あとちよつとだったのに！」

「勝者、雄馬

また負けてしまいましたねえ」

「次は自分が勝つッス」

「頼もしいですねえ」

次はネルと英子かな？

でもその前に

「雄馬、ジエイちょっと」

「ん？なんや？」

「なんかあんのか？」

レッツ拷問タイム

第十七話 描写の練習ですB Y作者（後書き）

次はキャラ紹介……したっけ？

たぶんしてないのでやろうと思います

え？誤字が多い？

ーっ小説終わってからね！

第十八話 うわぁ、なんてチート（前書き）

やっちゃいました

そして遅くなつてすみません

さらにキヤラ紹介じゃなくてごめんなさい

お願いだから見捨てないで！

第十八話 うわあ、なんてチート

「じゃあ、早速

試合開始」

ほんとに早速ですね

今さっき拷問が終わったところなのに…

「はああ！」

英子は突っ込んだ
腕を肥大化させて

え？あの2人？

異空間でぎりぎり窒息しないぐらいの酸素の部屋に置いてきました

「怖っ！？

でも負けねえッス！」

怖いのと勝ち負けは関係ないと思う

「よっ！」

(ズドオオ！)

「ちっ！」

女の子が舌打ちをするものじゃありませんよ？栄子さん

にしてもよくネルは紙一重でよけたな

「この程度ですら避けられないようなら生きていませんよ?」

アリアさん、心を読まないでください
てかどんだけハードなんだよ…

「今度はこっちからッス!」

(ザララ)

大量の武器?

ネル1人で扱いきれる量じゃないな

軽く100種類300個ぐらいあるな…

総重量2000?つてどこか?

鈍器もあるからかなりの重みだ

「そんなにたくさん扱えますの?」

「もちろん…こんな感じでね!」

(ビュビュビュビュビュビュビュビュビュビュ!)

サイコキネシス!?

全ての武器をいっぺんに飛ばすなんてどんだけチート?

「その程度…!」

はああああ!」

(バキバキバキバキバキバキバキバキバキ!)

飛んでくる武器を全部迎撃している
しかも木っ端微塵になってる
武器は消えて英子の足元に砂鉄が大量に

「その程度、迎撃できないわけありませんわ！」

いやいや、普通は無理ですよ？
しかも瞬間で砂鉄とかどんだけテクニックいるんだよ

「やるッスね！」

「あなたも！」

ネルはかなりでかい鉄球をさながらグローブのようにつけて
英子は素手で突っ込んでいく

（ドガア！）

「「おおおおお！」「」

2人のこぶしがぶつかり押し合う
そして

「「はあ！……」「」

同時に反対の手を突き出した

（（バキ））

その音とともに2人は消え
2人の後ろの森に道が出来上がった

「うわぁ…2人ともかなりのパワーね」

「そうね」

こちらの2人は仲良くなったようだ
さつきもバカがいて苦労するとか
もう少し上にちゃんとしてほしいとか
そんなことを愚痴ってた

その後アリアさんがそこに入っていつて一緒に話しをしていた

「それにしても2人ともその顔どうした？」

「「なんでもないわ

ちよつとぶつけただけよ」「」

絶対うそだ

ぶつけただけで顔が二倍になるはずがない

「どうしたんですか？」

「「何でもありません」「」

もしかしてアリアさんが？

でも話してたのほんの五秒ぐらいだし

話し終わった後は2人とも顔ははれてなかった…かな？

「アリアさんだったらどんだけ早業だよ…」

「それにしても2人とも遅いですねえ」

「そっぴや2人がまだ戻ってきてない」

「ちよつと呼んでみるか…」

「おーい2人とも大丈夫かー？」

「い、一応大丈夫です！」

「一応？」

「何かあったのか？」

「何もありません！」

「来ないでください！」

「ああなるほど」

「顔が某愛と勇気が友達の主人公のごとくなっているから見られたくないってわけだな」

「あいつって最初は普通の人間っていう設定だったんだよね、あ何がどうなって食品になったんだか…」

「わかった」

「じゃあ引き分けでいいか？」

「いいです！」

「じゃあアリアさん」

「はいはじめましょう」

じゃ遠慮なく

「行きますよ！

『ギヤラクシーブレイカー』！！」

「ふふふ」

(ズアツ)

「な！？」

一瞬で消された！？
超ショックorz

「はっ！」

突き？

(ザシユ)

ええー！

早い！そして何より

「合計20発

1発に見えてそこまで打ち出すとは」

「なんで生きてるんですか？
あなたは化け物ですか？」

「傷つきますよ？」

「全部心臓と首と頭を狙って
しかも全て手ごたえがありましたよ？」

「そのぐらいじゃやられませんよ」

完全に同時じゃないし抜けてから活動が停止するまでの間に回復すればいいだけだから
え？十分チート？
抜いてもらわなきゃ発動しないんだ！
そこが弱点かな？

「なら」

（シュッ）

「動きを封じるまでです」

消えたと思ったらロープで完全に縛られました
だがしかし！

「運動会プロテインパウアアアア！！」

（バリ）

「よく解けましたね」

魔法じゃ切れないようにしてたんですけど」

「身体強化して破った」

「なるほど」

興味深いですねえ」

そついやこの人一応研究者やってるらしい
すぐに実験を始めるらしい
俺達を戦わせてるのも実は研究のためだとか

「行きますよ！」

「『ブラックホール』！」

「その程度！」

(ズア)

かかった！

(ビシ)

「これは…」

「『ドレインバインド』」

対象から魔力を吸い取りつつ動きを封じる魔法です」

闇の魔法の応用版

なかなか使えるんだよ

「ふふふ」

「？何が楽しい印ですか？」

「本当に面白い人たちですね
実に興味深い」

なんか危ない事言ってる

「じゃあまずはあなたを研究させてもらいますか」(ヒュッ)

また消えた！？

魔法は封じたはずなのに！

「じゃあおやすみなさい」

(ゴス)

後ろにいた

首元に手刀が見事に決まった

そして薄れ行く意識の中間いた言葉は

「とりあえず体の中から調べますか」

そして俺は意識を…

手放してはいけない！

「あぶねえ！」

「あら？まだ意識があるんですか？」

「ああ何とかあなたの言葉でな」

「そうですか」

「もう好きなようにはさせ…あらっ…」

なんかふらふらする…

「これです」

アリアさんは注射器を取り出した

「かなり強力な麻酔薬です」

いつの間に？

「手刀と一緒に試してみました」

あの時か…

ん？

試した？

「これ試作品なんです」

ええ！？

試作品！？

「それってやばいんじゃない？」

「大丈夫ですよ」

「私がつったんですから」

「そこが心配なんです」

「人には一回も試したことはないですけどね」

「はいやばい！」

「絶対やばい！」

「大丈夫ですよ」

「モルモットは大丈夫だったので大丈夫ですよ」

「ならまだ安心でき…」

「痙攣してましたけど…（ボソ）」

「なんか今重要なこと言いませんでした!？」

「気のせいです」

「絶対気のせいじゃありません！」

こうして意識を保ち、かつ痙攣しながらアリアさんの研究（人体実験）にのぞむことになった

第十八話 うわぁ、なんてチート(後書き)

どうでしたか？

次の更新は二十八日予定です

ユニーク1000突破記念！もかねて…（前書き）

キャラ紹介です

やるっていいながらかなり遅くなりました

ユニーク1000突破記念！もかねて…

作者

「キャラ紹介！」

守

「遅い」

カリナ

「何でこんなに遅くなたの力説明してね？」

雄馬

「ただし30文字以上31文字以内な？」

作者

「二文字の範囲で！？」

えくと

今回遅れたのは書きたいことがあったからですごめんなさい」

英子

「ぴったりできましたね…」

作者

「こつというのは得意なんだよ
それよりお前ら」

全員

「「「「何？」「」「」

作者

「今回は新しいキャラの紹介だから帰れ」

全員

「……いやだ!」「……」

作者

「強制送還

さようなら」

全員

「……」「……」「……」「……」「……」

作者

「さてさて

今回紹介する皆さんです!どうぞぞ!」

ジエイ

「よっ!」

ミリー

「やっとな」

アリア

「後でこれを使いますか……」

ネル

「後で串刺しですね」

作者

年齢
16

身長
165

体重
60

見た目
テルズのイド

髪
まんまロド

目
上に同じ

好きなもの・人
バトル、強い奴、仲間

嫌いなもの・人
嫌みな奴、仲間を傷つける奴、ネコ

特徴
なんかもう作者が考えるのを放棄したとしか考えられないぐらいにロイにそっくり
性格も似ていて声まで似ているので完全にやっちゃったとしか考えられない

子供のころにネコに引つかかれて病院送りになったためネコが苦手
ネコに引つかかれた理由は野良猫を捕まえようとしたから

ジエイ

「なんかかつこ悪い…」

ミリー

「どこかの誰かよりましでしょ？」

盗賊

「はつくしゅ！」

ネル

「次はミリーさんツスね」

ミリー

「そうね

でもあんまり答えたくないものもあるんだけど…」

名前

ミリー・ナール

年齢

16

身長

153

体重

秘密

見た目

テイル のフア

好きな物・人

はつきりした人、ジエイ、武術

嫌いな物・人

はつきりしない人、虫

特徴

性格はまあまあはつきりしていてうじうじしているのが嫌い
バトルジャンキーではないが自分の技を磨くのが好き
ジエイが好きな理由は昔ジエイに助けられたからで
そのときに今の役職につくことを決意した

ミリー

「なによこれ!？」

ジエイ

「ん?なんだ?」

ミリー

「見るなあー！」

ジエイ

「な、何だよ……」

ミリー

「絶対みちゃだめ！」

ジエイ

「わ、わかったよ……」

アリア

「なるほど、面白いですねえ」

ミリー

「！」

ジエイ

「あれ？作者は？」

アリア

「ぎりぎり生かしておきました」

作者

「あ、う、あ……」

ジエイ

「生かさず殺さずだな……」

アリア

「次は私ですね」

名前

アリア

年齢

20

慎重

172

体重

秘密

見た目

イルズのジエイ をかなり美化したような感じ

好きな物・人

いじめ外がある人、いじめる事に関して気が合う人、拷問器具

嫌いな物・人

邪魔をしてくる人、かわい子ぶってる人

特徴

Sな性格

はつきり言ってる美人

なのでアリアさんにいじめてもらつ会があるらしい

週に一度自分の部屋にその会員を招きいれてO H A N A S I
しているらしい

アリア

「まったくひねりがありませんね」

ミリー

「あれ本当なんですか!？」

アリア

「本当ですよ？」

ネル

「なら自分へのほうを軽くしてほしいッス……」

アリア

「ネル、後で部屋に来なさい」

ネル

「ああ、逝って来るッス」

ジェイ・ミリー

「「逝ってらっしゃい」「」

ミリー

「ネルが行っちゃったから私達で紹介しましょうっか」

ジェイ

「そうだな」

名前

ネル・マーフィー

年齢

15

身長

156

体重

やっぱり秘密

見た目

目はたれ目で後はきれいな顔立ちだ

髪

黒いストレート

長さは肩ぐらゐまで

目

ブラウン

好きな物・人

優しい人、落ち着くもの

嫌いな物・人

虫、上司

特徴

語尾にツスがつき

よくパシリに使われるタイプの人

本人は否定しているが上司に命令されると何でもやってしまう

ジエイ

「なんかまんまだな」

ミリー

「そうね」

作者

「あ、ああ……」

何とか動けるようになった」

ジエイ

「お、作者

復活したか」

作者

「なんとかな

とりあえず紹介終わったみたいだな」

ミリー

「何とかね」

作者

「今回だけでも主人公になった気分はどうだった？」

ジエイ

「今回俺達が主人公だったのか？」

作者

「そつだよ？言ってなかったっけ？」

ミリー

「言ってなかったわよ」

作者

「まあいいや」

とりあえずキャラ紹介終了だな」

ジエイ

「まあそうだな」

アリア

「ふう、すっきりしました」

作者

「お帰り」

アリア

「ん？もう終わりなんですか？

ほら、ネル、早く来なさい

終わってしまいますよ？」

ネル

「う…あ…」

作者

「無理そうだな」

ミリー

「じゃあネル以外で…」

ネル以外

「「「「これからお願いします!」「」「」

ネル

「う…あ…」

作者

「書くとき名前出したほうがいいかな?」

ミリー

「この前変えたばかりじゃないの」

ジェイ

「俺は読みやすいと思うぜ?」

アリア

「私もです」

作者

「じゃ書き方変更な

時間が空けば他の話も変えていくことにしよう」

アリア

「そうしてくだかい」

ユニーク1000突破記念！もかねて…（後書き）

はい

というわけで今度から書き方変えます

なんかしょっちゅうすいません

第十九話 実験と過去の話（前書き）

ネタがなかったなのでこんなことになりました
だが後悔はしていない！
そして誰か感想くれ〜！

第十九話 実験と過去の話

守

「あ…う…」

や、やっと終わった…
死にかけた…

英子

「守ちゃん！？
こんなに弱って！」

今一番見つかってはいけないであろう人に見つかった

英子

「ハア…ハア…私の部屋で休ませて差し上げますわ」

アリア

「いや、見事にかかりましたね」

英子

「あ、アリアさん？
なぜそんなにいい笑顔を？」

アリア

「うふふ」

よかった…

何とか助かったかもしれない…

アリア

「さて、行きますか」

英子

「いやー！」

なぜ俺まで連れて行くんですかな？

ちよ、2人揃って首の後ろ引っ張られてるから隣の人の息が荒い

(ギョ)

よってきたー！

俺オワタ

視点、ジエイ

「ギヤアアアアア!!」

ん？誰かの断末魔が…

ご愁傷様

雄馬

「どないしたんや？」

ジエイ

「え？ああちよっと断末魔が聞こえて」

雄馬

「ああそうなん？」

「ご愁傷様やなあ」

突然だけど俺は耳がいい

一度試してみたらウサギ並に耳がよかった

そのため…

「新しくきた人つてさ、かつこよくない!？」

「だよねえ!」

「ちよつ、押すなよ!」

「俺にも覗かせろよ!」

「いや、いい天気ですな」

「そうですなあ」

みたいな感じで人が多いとつるさくてしょうがない

雄馬

「とりあえず外行けへんか？」

「模擬戦したいし」

ジエイ

「いいぜ、行こう!」

さて、せっかく俺視点だから俺の過去話をするか

あれは雄馬達がくる前の事だ

あの日は森に鬼狩りに出かけてたんだけど道に迷ったんだ

・：*：。：。：。：*：。：。：。：。：。

(ズズン)

ジエイ

「よし！倒した！

次行こうぜ！」

ミリー

「あんた本当に元気ねえ？」

どこからそんな元気が出てくるのか聞いてみたいわ」

あの日はなかなか順調でいつもより早く帰れそうだった

ジエイ

「ほら、早くしろ！」

ミリー

「ちょっとは待ちなさいよ」

ジエイ

「なんでそんなに遅いんだ？」

「ミリーは足が遅いからな」

ミリー

「聞こえてるわよ、スカー！」

スカー

「おお怖っ

早く行こうぜ！」

こいつはスカー

その時一緒に仕事をした仲間だ

その日は何もなかったが早めに仕事が終わった以外何もなかった

次の日

ジェイ

「お前、他の仕事行くんだろ？」

スカー

「まあな！」

ミリー

「大丈夫なの？」

かなり危険って聞いたけど……」

スカー

「大丈夫大丈夫！」

俺に不可能はない！」

スカーは自信満々に同じ仕事をする仲間と目的地に向かった

ジエイ

「さて！俺達も行くか！」

ミリー

「そうね」

この日はスカーがいないせい
少し時間がかかってしまった

その帰り道

ミリー

「スカーが早く帰ってきたらいいのに」

ジエイ

「遠征だから遅くなるだろうな…
つて、まさかお前！
スカーが好きなのか！？」

ミリー

「バーカ

あんなキモイ奴誰が好きになるのよ」

ミリーはそんな事を言っ
てはいるがスカーはな
かなかイケメンで城
ではファンクラブまで
できていた

ミリー

「そうじゃなくて

あいつがいないから効
率が悪いのよ」

ジエイ

「たしかにあいつは強いからなあ」

スカーは強かった

本当は隊長クラスの実力があるにもかかわらずこのぐらいが楽でいい、という理由で昇格を拒んだ

あいつは少し短めの剣を2本使う二刀流だった

その早さと髪の色から

『白き疾風』なんて呼ばれていた

だから信じていた

あいつが帰ってくることを…

でも帰った俺達は信じられない光景を目にした

ミリー

「なによこれ！」

スカー達と一緒に仕事に向かった人達が傷だらけで倒れていた

ジエイ

「何があつた！」

「あ、悪魔……」

悪魔だ……」

悪魔

それを聞いて思い出した

今日、朝に聞いた話しを…

「ねえ聞いた？」

「なにを？」

「アーデイス山脈の話し！」

「聞いた聞いた！」

悪魔が出たらしいわね！」

「そうよ！」

でもたぶん大丈夫よ」

「なんで？」

「スカー様そのあたりの鬼狩りに出たらしいから」

「じゃあ安心ね」

そんな話しを聞いていた

スカーなら大丈夫

スカーだから安心

そんなふうを考えていた自分を殴りたくなった

ジエイ

「スカーは

スカーはどこに！」

「お、俺達を逃がすために残った……」

ミリーの顔を見ると真っ青になっていた

今告げられた事はスカーは死んだということに等しい

俺達はしばらく何も考えられなかった

幸いスカーが死ぬところを誰も見ていないので

(スカーが死ぬはずない！絶対にどこかで生きている！)

そう自分に言い聞かせた

でもスカーは帰って来なかった

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

その後聞いた話によると、スカーはあの後死んだらしい

それから数日後

守や雄馬達が来た

そのときは驚いた

雄馬は髪の色以外はスカーにそっくりだったから

雄馬

「さあて、やるか!」

ジェイ

「おう!」

視点、守

守

「ハア…ハア…」

や、やっと終わった…

英子

「も、もうだめですわ…」

まったく…

何で俺まで実験されてるんだ…

俺はもうすでに実験という名の拷問は受けたのに…

カリナ

「2人ともどうしたの?」

や、やばい…この流れは…

アリア

「かかりましたね」

ああ、天使が見える…

もうすぐ行くよ…

パ
ラ
ッ
シ
ュ
…

第十九話 実験と過去の話（後書き）

スカーはそのうち出そうかなあと思っていたりなかったり
敵にするのもいいけどね

ついでに髪の色は銀髪です

白髪はかっこ悪いからね

またまた番外編！ 今何部目でしたっけ？（前書き）

タイトルは関係ないです

またまた番外編！ 今何部目でしたっけ？

作者

「どもももも」

守

「どうした」

作者

「まったく更新していなかったこの小説が、一日七人ぐらい確認してくれてるんだよ
だ・か・ら！」

守

「だ・か・ら？」

作者

「暇つぶしにもし異世界に行ったら…
を開催します！」

守

「はあ？」

作者

「要するに、君らを二次に出したらどうなるかを検証するんだよ」

守

「100%いやなことになるな」

作者

「問答無用！」

早速いって見よう！」

魔法少女リリカルなのは

守

「なのは、どうするよ？」

なのは

「どうするも何も、やるしかないよ！」

守

「だな！」

ギャラクシー！」

なのは

「スターライト！」

守・なのは

「「ブレイカー！」「」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

なのは

「ま、守君？」

守

「ん？どうした？」

なのは

「あ、あの…」

守

（もしかしてフラグ？）

なのは

「わたしと…！」

作者

「以上！」

守

「なぜそこで終わる」

作者

「いや〜ここはやっぱり

皆さんのご想像にお任せします

だろ〜」

守

「本音は？」

作者

「これをやったら絶対続編でなのはにフラグ立てなきゃいけない
る…」

守

「マジか？」

お前続編なのはにしようとしたのか!？」

作者

「今ネタバレしたのでやらないけどね」

守

「ああそうですか」

作者

「はい!次!」

遊戯王

まりも

「滅びのバーストストリーム! (笑)」

遊星

「うわああああ!」

リーゼント

「勝者、まりもおおお!」

今年のデュエルチャンピオンの誕生だああああ!」

竜王

「だがどうやって」

雄馬

「じつや！」

どうだ？私の部下になるなら世界の半分をやるう
部下にならないなら…ここで死ね！」

竜王

「なるほど…」

雄馬

「はい！もう一回！」

作者

「完璧」

雄馬

「面白いなあ」

守

「問題はなぜ竜王に演技指導しているのかだ」

雄馬

「一回やってみたかってん」

守

「はあ……」

作者

「はいはい雄馬は出番終ね」

雄馬

「けちやなあ」

雄馬が退室しました

作者

「早速次じゃ」

ゴクセン

カリナ

「あたしはまじめなのに……」

くま

「おい、カリナ、やんくみが呼んでたぞ」

カリナ

「もいいい……」

ぐれてやる!!」

作者

「不良www」

カリナ

「まじめだもん！
勉強してるもん！」

守

「九九いえるのか？」

カリナ

「なめてるの？」

作者・守

「「今度勉強を教えてください」」

カリナ

「あんたらドンだけバカなの！？
やってられないわ！」

カリナが退室しました

作者

「まさにツンデレ」

守

「だな」

作者

「次いきますー！」

ポケモン

英子

「冷凍ビ」

作者

「終了(笑)」

英子

「何でこんなに短いんですの!?!」

作者

「理由は読み返せばわかる!」

英子

「え」と

作者

「強制脱出装置(笑)」

英子

「え?ええ!?!」

英子が退室しました

守

「ああ、危険が離れていく…
最高…」

作者

「T U G I D A !」

ワンピース

ティーチ

「ぜははは(ゴス)はぶう！」

アリア

「うるさいですね」

ネル

「手をかすツス！」

ジエイ

「喧嘩か？

混ぜろ！」

ミリー

「楽しそうね

混ぜなさいよ」

クロひげ一味

「「「船長——！！」「」

作者

「最高WWW」

守

「確か五十行ってたよな？」

あのキャラ」

アリア

「まったく短いですね」

作者

「さつきも言われた

でもさつきよりは多いから勘弁」

ネル

「仕方ないから許すツス！」

ミリー

「行きましようか」

ジエイ

「スカーは元気かなあ

…死んでるかもしれないんだけどな…」

作者

「最後暗い

ではさらば！」

四人とも退室しました

守

「けつきよく何がしたかったんだ？」

作者

「実はネタがなかったただけだったりする」

守

「はあ……」

作者

「ため息は傷つきますよ」

守

「黙れ」

作者

「作者権限により、フラグ最高神のご加護をつける！」

守

「やめるおー！」

作者

「やだ」

もともとフラグだらけなんだからいいじゃん」

守

「へ？」

作者

「では皆さんまた来週〜！」

守

「今のはどういう意味だ！」

作者

「こら楽しいな

またやるう」

守

「なんなんだあー！」

またまた番外編！ 今何部目でしたっけ？（後書き）

やっちゃまったやっちゃまった

鬼編が終わったら一回終了ですよ

まだまだ続きますけどね

第二十話 黒幕（前書き）

遅くなりました！

これからも遅くなります！

守

「ヴォイコラ」

第二十話 黒幕

「例の作戦はどうなっている？」

髭を蓄えていて、角が生えた老人が玉座に座りながら聞く

「只今準備段階ですが、もうすぐ準備は整います
ゲヒヒヒ」

それに答えたのは醜い老人

しかし、2人の目には老人とは思えない程の欲望がと魔力がにじみ
出していた

「そうか…」

ついに我が悲願が叶うときがきたのだな！

はっはっはっはっは！！」

「……………」

笑う二人を見て不愉快そうに顔をしかめる吊された少年

「どっした？」

お前の仲間が止めにくるだろ？」

「あいつらは、絶対に来る…！」

「まあ来たところで返り討ちにするだけだがな！
はっはっはっはっは！！」

「ゲヒヒヒヒ！」

「ジエイ……」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

守

「と、いう夢を見た」

雄馬

「なんか面白いなあ」

カリナ

「そうね」

ミリー

「内容もそうなんだけど」

アリア

「全員が同じ夢を見ているところが面白いですね」

今日は俺達も含めてイーグルスの全員がアリアさんの実験の被害で入院中

それをアリアさんが見舞いに来てくれたのだが、なぜか全員同じ夢を見ていたらしい

ネル

「本当に不思議ッスよねえ」

ジエイ

「……………」

ミリー

「どうしたの？」

ジエイ

「あれは、スカーだ」

異世界組

「……！？」

ミリー

「たしかにそうだけど

スカーはもうこの世にはいないのよ？

それに只の夢よ」

ミリーは言い切っているが、ジエイはどうも納得がいかない様子

アリア

「……………」

すこし調べてみます

あれは城のなかでした

それにまだ新しいようでしたから、近頃できた城を調べればわかる
でしょう」

やっぱりすごい人

どうしたらこんなに何でもできる人になるんだ？

アリア

「やっぱり特訓ですね」

守

「心を読まないでください」

まったく…

ジエイ

「……………」

ミリー

「ジエイ、1人で行かないでね
あんたは直ぐに突っ走るから」

ジエイ

「わかってる…」

そういつてジエイは退室した

アリア

「では私もこの辺で」

アリアさんもでていった

この時、1つ気になることがあった

守

「なあ、雄馬」

雄馬

「どしたん？」

守

「あいつ傷の治り早くないか？」

たしかさっきまで俺達と同じくベットにゴロンだったはずなんだけ
ど…

雄馬

「ああ、どうも回復が早いらしいわ
体質なんちゃうかな？」

適当だな、おい

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

視点、ジェイ

(ジェイ…)

あれはスカーだった…

間違いない、髪、顔、そして双剣

すこし変わってはいたが、あれは間違いなくスカーだった

俺はいてもたってもいられなくなり

情報を集めることにした

町、村、城の中、あらゆるところを歩いて回ることにした

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

視点、アリア

ふむふむ

アリア

「なかなかおもしろいことになりましたねえ」

早速皆さんに報告に行きますか

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

視点、守

ジェイが出て行き1日

よく考えたら俺は回復魔法を使えることを思い出した

守

「と、いうわけで

『ベホマ ン』!」

全回復

(ガラ)

ん?ジェイが入ってきた

ジェイ

「俺、一回いろんなところを回って情報を集めてみる

だから、しばらく旅にでる」

いきなりだな、おい

ミリー

「ちょっと、あんた待ちなさ」だめですよ?」「隊長!」

いつのまに?」

アリア

「面白いことがわかりましてね

ジェイにも聞いてもらいたいんですが…
どうします?」

ジェイ

「……聞きます」

肩ガツされてるもんね

逃げられないもんね

逃がす気0だもんね

アリア

「実は場所の特定ができました」

全員

「「「「「「「!」「」「」「」「」

やっぱりできる人は違うねえ

アリア
「場所は一度精鋭達を集めて作った部隊が遠征にいき、ボロボロになつて帰つてきた魔の荒野です」

ミリー

「でも魔の荒野は1000m2ありますよ？
場所の特定にはならないんじゃないか……」

アリア

「はい、しっかりとした特定にはなりません
しかし、近頃鬼がその荒野に集まっているという事を聞きました」

ジェイ

「それが本当ならなんで誰も見に行かなかつたんだ？」

アリア

「量です」

鬼の量は魔の荒野を完全に埋め尽くしていました
こちらはそこまでの兵力も無ければ、それを一掃できるほどの兵器
もありません」

守

「ふん

じゃあ行くか」

全員

「……………!?」「……………」

アリア

「聞いてなかったんですか？」

私達では歯が立ちません

それに私は隊長としてあなた達の安全を確保する義務があります」

守

「入院中にジェイから聞いたけどスカーって奴はこの隊だったんだ
る？」

アリア

「はい、そうです」

守

「なら救出しなきゃいけないんじゃないか？」

仮にも生きている可能性があるんなら助けに行くべきだ」

アリア

「ですが「それに」…」

守

「俺達が死ぬとでも？」

アリア

「……」

はあ……

わかりました

ただし、後一人は「次元斬」……

明日の朝、出発します」

全員

「……………いよいよ……」

まりも

「今飯食べて」「これこれこついう理由が」「OKOK、やってやるぞ
全速前進DA！
ヒヤッハーーーーー！！！」

助っ人は完璧

あ、能力を忘れてた

守

「封印解除

これで風と雷は自由に使えるぞ」

まりも

「さてさて、雄馬！」

雄馬

「どしたん？」

まりも

「こついうのを」

雄馬

「おもしろそうやなあ」

まりも・雄馬

（（ニヤリ）（

なにこれ、怖い

第二十話 黒幕（後書き）

次回は出撃！

さてさて、まりもと雄馬の秘策とはいかに！

次回を待て！

第二十一話 殲滅D A (前書き)

今回は文字数が少なめですが

他の小説も書かなければいけないし

ネタがなくなってきたしなので勘弁してください

今回は書き方変えてみたので感想くれるとありがたい

第二十一話 殲滅D A

で、早速魔の荒野にきています
広さは1000km²らしいです
広すぎるよね？

どうやって探すのかわからなかったんだけど
ここに来てもう一つの目的ができましたよ！

守

「多い…」

カリナ

「仕方が無いんじゃない？」

ジエイ

「スカー…待ってるよ…」

ミリー

「どれだけいるのよ」

目の前には鬼が軽く1000000
ついでに1人だけ違うこと言ってる人一人

アリア

「多いですね…」

援軍でも呼びましようか？」

守

「誰を呼ぶんですか？」

アリア

「ちよつとした友達ですよ

大丈夫です

強さは保障します」

なら安心

守

「お願いします」

アリア

「ではこことこことここからこの人達を……」

守

「結局は俺頼みなんですね

まあとりあえず次元斬改！」

説明

次元斬改とは、適当にやってたらで来た業である

普通の次元斬とは違い、一度に対象を複数呼び出すことができる

???

「「「ここはどこですか？あ、アリアさんお久しぶり」「」」

アリア

「お久しぶり、元気にしていましたか？」

「もちろん」

「ええ」

「楽しく過ごしてます」

上から

チートをこえたチート達よりシエリアさん

伝説の王を継ぐものよりシャルンさん

魔法少女リリカルなのは、最弱の転生者よりガンブレードさん

ついでに全て家のバカ作者の小説のキャラクターだ

守

「何でもありますね」

Sな方々

「……それほどでもないです」「」「」

ハモりましたよ

この人たち

さて！

心強いゲストも来た事だし！

守

「さあ！行く…ぞぞ？」

まりも

「そ〜れっそ〜れっそ〜れっそ〜れっそ〜れ〜！」

雄馬

「ほいさ〜ほいさ〜ほいさ〜ほいさ〜！」

なあにこれ？

今日の前に広がってる光景は

鬼がどんどん頭部を失って倒れる姿

そしてそれを行っているのはまりもと雄馬
やっていることはこうだ

- 1、悠馬が野球のボールぐらいの大きさの鉄球を作る
- 2、まりもがそれを受け取る
- 3、大きく振りかぶって
- 4、投げる
- 5、平均6体の頭部が吹っ飛ぶ

おそらくレールガンのものなのかな？

投げる最中に磁力を発生させて、それで一気に加速させる
そして頭部が吹き飛ぶと…

守

「いまさらながらなんてチート？」

アリア

「そつですかね？」

シエリア

「普通にできますよ?」

シャルン

「ほら」

ガンブレード

「ですよねえ」

四人そろって石ころで、しかも投げるだけであれと同じぐらいの威力出してるよ…

守

「チートすぎる…」

じゃあ俺もやりますか

危ないけど…」

敵は残りおよそ30000

発動するまでにおよそ100000が減ると考えて…

約500km2ぐらいの広さで、一瞬で駆逐できる魔法か…

やってみますか

では基本から

1、魔力を練りだして自分の両手のひらに圧縮

2、限界まで圧縮したらそれぞれをあわせて形を想像し創造する

3、今回は魔力で伸びる剣にしてみました

4、完成したのでついで作った鞘に入れて、いあい斬りの構えを

とる

5、ありったけの魔力を込めながら思いっきり振りぬく

守

「あ、やりすぎた」

(ドシューウ！)

色々と宙を舞った

まりもとか雄馬とか俺とか

俺が飛んだ理由？

簡単だ

アリア

「なにをしてるんですか？」

シエリア

「あやうくやられるところでしたよ？」

シャルン

「わざとですか？」

ガンブレード

「まあどちらにしろ」

Sな方々

「「「「頭を冷やしてもらいますね？」」「「「「

てなわけで

オワタ

守

「いやあああああ!!」

アリア

「はあっ!!」

守

「ギヤアツス!!」

シエリア

「はあああああ!!」

守

「アババツバあああ!!」

シャルン

「やああ!!」

守

「ヒデブウ!!」

ガンブレード

「よっと」

守

「ちよっ!?!もうちよいまじめにギヤアアアアバババ!!」

燃え尽きたぜ……

リアルに……

守

「すぐ戻るけどね！」

アリア

「あれですかね？」

シエリア

「みたいですネ」

あなた達、ワタシのポジションを取らないで
ただでさえ作者の相方のポジション取られたんだから

雄馬

「じゃあいこか！」

まりも

「おっしやあああ！！」

まりもも雄馬も元気だな
黙らせたくない……

守

「ちよつと2人来い」

雄馬

「なに？」

まりも

第二十一話 殲滅D A（後書き）

どうでしたか？

どこを変えたか気づかない人はおいと思いますが……

まさに今の……ですね

いままでは……とか……とかだったんですけど変えてみました
読みやすさと見栄えの良さにより取り入れてみました

と・こ・ろ・で

ここまで遅いので、一旦全部終わらせて一つに絞ろうかと思ってる
んで

今出てきてる城をブーン したら一旦終わりにしますね

守

「俺の影があああああ!!」

扱いごと影が薄くなっていく主人公（笑）

守

「うわあああああん!!」

ではまた自壊……じゃなかった

また次回

第二十二話 最終？（前書き）

最終回にするつもりだったのに……

ストーリーをもち過ぎて先延ばしにしてしまった……

では最終回にするつもりで書いた一話をどうぞ！

第二十二話 最終？

なんというご都合主義

この頃の作者は手抜きが多いな

作者

「それほどでも」

守

「まだ描写もしてないのに出てきてんじゃねえよ」

作者

「まあまあ城に突入してみたところその場にラスボス的な人物とその側近的な人物がいただけじゃないか」

しつかり言っちゃったよ……

俺の立場が……

城の中は意外とボロかった

かなり古そうに見えるんだが……

アリア

「この城……」

私と同じ魔法で作られたようですね」

「その通り！

我が魔法で復元したのだ！」

ちっちゃいじいちゃんがなんか言ってる

「ヒルム様の力を借りるまでもない！
貴様等はこのシャガが葬ってくれ（ガスン）ホガア！？」

アリア

「あなた、私と同じ魔法を使うんですね？
なら、私以外にこの魔法を使えるものがあるのは不愉快です
消えてもらいますよ？」

シャガ

「ふん！消えるのは貴様のほうだ！」

（ドゴン）（メキヤ）（バキバキ）（グシャア）（パキヨ）（グチ
ヨ）（ベシヤ）

アリア

「ふう……」

終わりましたね」

シャガ

「……………」

生命反応がない
ただの赤いもんじゃ焼きのようだ

ヒルム

「ふん、死んだか……
だが私はそう簡単には（ガス）ぐう！」

カリナ

「あたしたちの出番は無いわけ？」

作者

「いや、そういうわけでは……」

ネル

「ハッキリするッス！」

作者

「いやだから……」

英子

「言い訳無用ですわ!!」

作者

「ヒルムヘルプ！」

ヒルム

「なぜ私なのだ！」

他を当たれ！」

作者

「無理だつて！」

(ドゴア) (グシャア) (グチャ) (バチヨ) (グチヨ) (ビチャ)
(ドチャ)

守

「死者蘇生！」

作者

「赤いもんじゃになっても攻撃された
してその理不尽な扱いを俺は受けたにも関わらず
無傷で立っているかて手めえが気に入くわねえ」

ヒルム

「なに？」

作者

「次の小説のキャラに使わせる予定だったが仕方がねえ……
塵にしてやらあ……！」

なんだかんだで描写が出来なかつたけど一応ね

作者は白いギターを取り出した

どこに隠してたんだよ……

作者

「ヘル・ノイズ！」

作者はギターを引き始めたが

態とやっているかのように精神的に堪える音を出し始めた

ヒルム

「ぬううう！」

頭があああ……！」

作者

「守！」

殺れ……！」

守

「OK任せろ！
アルコバレーノ！」

自分の前に虹ができる

守

「七色に輝く虹よ！
今こそ剣となり、敵を打ち砕かん！！
レインボー・ブレード！！」

ついでに一振り地球に穴を開けれるくらいの威力です

守

「せい！」

それを投げつけた
理由は簡単
楽だから

（ザドオオオオ！！）

ヒルム

「クアアアア！！」

消えた

あっけなさすぎる……

作者

「お疲れ」

守

「あっけなさ過ぎないか？」

作者

「早く終わらせたかったしね」

守

「マジかよ……」

作者

「だが安心しろ」

守

「続編書くんたる？」

作者

「違うよ？後ろ見てみ」

後ろ？

(クルッ)

マジカ……

ジエイ

「スカー！」

スカー？

「我が名は悪魔、古の召喚によりこの者の魂と体をいただき召喚さ

れた

「我は命令に従い、人間を滅ぼす!!」

マジカー……

めんどくささMAXだなおい……

作者

「文字数稼ぎのためにも出してみました」

守

「どれだけ自由にすれば気がすむんだ？」

作者

「どれだけやっても気がすまない!!」

言うと思った……

作者

「じゃあがんばれ

俺帰るから」

守

「は？」

作者

「BWでヒコザとか育てたいんだよ」

守

「まじか？」

作者

「大マジ

じゃあがんばれ

グッバイ!!」

行きやがった……

面倒ごとを残しやがって……

ジエイ

「スカー！俺がわからないのか！」

悪魔

「貴様は誰だ？」

我が名はスカーではない悪魔だ

スカーとはこの者の名か？

残念だが今はただの入れ物だ」

うわぁー……

これ絶対傷つけずにとか面倒な事言うタイプだ……

アリア

「倒すしかありませんね」

ミリー

「そうですね……」

ジエイ

「おい、待てよ！」

どうにかして戻すことはできねえのか!?!」

ほらでたよ

アリア

「無理です

悪魔の力は絶対

この世の力では戻すことは不可能です」

ジエイ

「そんな……」

アリア

「とにかく

倒すとまではいかなくとも

動きを封じるぐらいにはダメージを与えないと、会話もできませんからね

早めに弱らせましょう」

ジエイ

「わかりました……」

君らよくこんな状況でお話できるね？

カリナ

「危ないわね！」

雄馬

「どつやって戦うんや？」

まりも

「全速全しゅん」

レーザーが飛びまくってます
悪魔は全身からレーザーを発射している
さらにレーザーは壁に反射して襲ってくる

それを見て威力がなさそうだと思ったのかまりもが突っ込んでいく
とレーザーに当たって塵になった

アリア

「厄介ですね……」

ネル

「避けるのが…精一杯ッス！」

みんな苦戦してるなあ……

カリナ

「ちよつと守！」

あんたちちゃんとやりなさいよ！」

守

「なぜに？」

カリナ

「あんた障壁で防いでるからいいけどこっちは命がけで避けてるの
よ！？」

バレタカ

できる限り薄くしたんだが……

守

「なら雄馬に守ってもらえ
地面を盛り上げれば防ぐぐらいはできるだろ」

カリナ

「なるほどね

雄馬！聴いてた！？」

雄馬

「ばつちり聞かせてもらってたで！
任せとき！」

そついうと雄馬は全員の周りに岩の壁を作り出した

雄馬

「完璧や」

しかも中には通路があり
さらに明るい
合流できるようになってるのかな？

アリア

「で、どうしますか？」

ミリー

「どうするも何もこの世の力じゃ何もできないって隊長が……」

まりも

「なあ……」

守

「なんだよ、うるせえな」

まりも

「まあ聴け

この世の力がダメなら異世界の力ならどうなるんだ？」

なぐる

アリア

「賭けてみる価値はありますね」

雄馬

「よう思いついたな」

カリナ

「ダメでバカであほでどうしようもないあんたがよくその答えを思いついたわね」

まりも

「ひどすぎる……」

orzしてるまりもは無視して全員で作戦を立てる

そしてまりもが回復しないうちに作戦が決まり

岩の壁が解除される

まりも

「あ？バババババババババ！！？」

岩の壁が消えることを1人だけしらなかったまりもは1人レーザー

に当たって塵になった

直後に回復させてるご都合主義だからいいけど
でも治してるの俺なんだよなあ……

ジエイ

「さあ！

スカーの体を返してもらっせー！」

悪魔

「ほざけ！

貴様らに何ができる！」

ジエイ

「やってみなきゃわからねえだろ！

いくぞみんな！」

全員

「「「「「「「「「「「「おっ……！」「」「」「」「」

第二十二話 最終？（後書き）

守

「結局文字数稼ぎが行き過ぎたな」

てへ

だが後悔はしていない！

守

「そうか」

では次回こそ！

最終回！…かな？

守

「自信持てや」

仕方が無いよ

今回が今回だし

守

「では」

S y u r a ・ 守

「次回をお楽しみに!!」

最終話 終わりと始まり（前書き）

今回で最終回です！

もう何も言いません！

楽しんでくれれば幸いです！

どうぞ！

加勢するッス！」

英子

「行きますわよ！」

2人が突っ込んでいく

英子・ネル

「ファースト・アタック！」

思いつき殴りつける

ネルは腕を強化しているようだ

(ゴシヤ)

悪魔

「ぐぬう……」

(ドロン)

悪魔は10mは離れてる壁にめり込んだ

悪魔

「だが、これしきのじゃ……」

英子・ネル

「セカンド！」

悪魔

「!?!」

(ドガン)

もう一発殴った

さらに壁にめり込む

悪魔

「かつ……」

英子・ネル

「「ファイナル……!」」

2人とも腕が肥大化してるよ
女の子のすることじゃないよ

悪魔

「!」

英子・ネル

「「ラーツシュ……!」」

(ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ)

そのまま動体視力を強化してる俺でも腕が消えて見えるほどの速さ
で殴りつけてる

英子・ネル

「「やあ……!」」

(メキヤ)

顔面に炸裂

悪魔

「うおおお!!」

英子・ネル

「「キヤアア!!」」

悪魔が波動的な何かを放ち
2人が吹き飛ばされる

悪魔

「この程度…!!」

カリナ

「プロミネンス!!」

(ドウウ)

ミリー

「はっ!!」

悪魔

「!?!?」

(ドウウ)

カリナはマグマを悪魔の足元から噴出
ミリーは遠くから拳を突き出して、その衝撃を飛ばした

相変わらずどこまでチート？

悪魔

「はああ！」

黒い魔力の弾らしきものを発射する

カリナ

「太陽剣レオソード！

熱閃！熱断斬！！」

カリナは赤い剣を作り出し

それを地面にたたきつけるように振った

すると赤い斬撃が悪魔めがけて飛んでいった

悪魔

「防ぎきつてくれる！」

ミリー

「心頭滅却……

竜神乱舞！！」

ミリーは構えをとり息を整え

一気に悪魔に近づき悪魔の全身をくまなく殴りつけた

しかも1往復の所有時間0.005秒

それを200セット

どこまで鬼畜……

悪魔

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
(

うわああああ……

ここまでくるとかわいそうになってきた

雄馬

「とどめにこれや！」

まりも

「サンダー・ストーム！」

雄馬

「ポイズン・ローズ！」

まりもはどこかの変態の技をだした

そして雄馬は紫のバラのバケモノ（全長30m位）を出した

雄馬

「ウィップ！」

雄馬が出したバラが悪魔に突進して鞭というよりはハエたたきみたいに棘付きの茎をたたきつけた

悪魔

「ぐふう……！」

衝撃より毒のほづがつかいのだろう
吐血した

その直後

(ザドオオオオン！)

悪魔

「ガアアアアアア！」

まりもの技が直撃した

悪魔

「くううつ…！」

しかしこれほどのことで…！

！、魔法が使えない！？

毒で魔力が枯渴したか！」

どんだけチートな毒だよ……

まあ楽になったからいいけど

守

「やっと出番か

やっぱりここは空気をよんで……」

アリア

「私達ですかねえ

行きますか」

イエッサー大佐

守

「光と闇を、あわせて最強

守

「最後はゆずってやるよ目を覚まさせてやれ！」

ジエイ

「おおー！」

おおおおおおおおおおおお！

らあああああああああああああ！……！」

悪魔

「あああああああああああああああ！……！」（ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザン！）

悪魔の体はずたずたに

そしてコアは、

（コオオ……）

寸前で壊れてないな

よし、ここはやっぱり主人公である俺が！

守

「悪魔被い」

剣を突き刺すだけに、見えるが

一応封印と解呪と悪霊払いを全部同時にこなす高度な魔法超疲れる

(バキイイイイン)

悪魔

「バカな、バカなあああああああ!!」

スカー?

「う……ここは?」

ジエイ

「スカー!」

スカー?

「ん?ジエイか?

お前が助けてくれたのか?」

ジエイ

「俺だけじゃねえよ

こいつらもだ!」

スカー

「そうか……

めいわくかけちまったみたいだな……」

ジエイ

「さ、帰ろうぜ!」

スカー

「おう!」

こうして俺達はスカーを助けだし

鬼の現況を倒すことができた（俺達必要なかったような……）
こうして俺達はそれぞれもとの世界に帰ることになった

ジエイ

「もう行っちまうのか？」

カリナ

「あたし達は鬼を消すためだけにきたからね」

スカー

「にしても本当に似てるな」

雄馬

「ほんまにそっくりやなあ

ちよつと違うとことかあるけどな」

ミリー

「これでさよならね」

ネル

「絶対忘れないッス!!」

英子

「どうせまた会えますわよ」

まりも

「そうそう

たぶんな！」

アリア

「そんな事言ってるから分かれるのがつらくなるんじゃないでしょうか？」

神

「ほれ、行くぞ！」

ドーンー！！」

異世界組

「「「「ええー！？まだ挨拶すんでな、ああああああああああ！！」」」」

「「「「「.....」」」」」

ジエイ

「いったな」

ミリー

「そうね」

ネル

「うう.....」

アリア

「ネル

泣いてたら幸せが逃げますよ？」

ネル

「はい.....」

一方、異世界組は

神の城までやってきていた

神

「お疲れ」

カリナ

「あつというまだったわね」

雄馬

「そつやなあ」

英子

「そつですわねえ」

まりも

「でも楽しかったよな」

神

「さて、一応この空間にきたわけだが
お前ら、行きたい世界があれば言え
そこに飛ばしてやるよ」

カリナ

「え？いいの？」

神

「いいよ」

英子

「どこでもいいんですか？」

神
「ああ」

雄馬
「ほんまやな？」

神
「しつこいぞ」

まりも
「ならやっぱりあそこだな」

神
「全員いいか？」

異世界組
（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

神
「OKだ
守はどう……守どこだ？」

異世界組
「」「」「あ……」「」「」

ジェイ達の世界

ジェイ
「またくるかなあ」

ミリー

「わからないって」

ネル

「いい人でしたよね」

守

「置いてかれた……」

ジエイ

「まあ、いつかはくるだろ」

ミリー

「そうね」

ネル

「そうツスね」

守

「あれ？無視？
かなしい……」

「ああ、なんか腹が立ってきた」

「あんの糞神——！！」

神・カリナ・雄馬・まりも・英子

「「「「あんまり怒ると幸せが逃げるぜ？」「「「「「」

守

「お前ら——！！」

ジエイ

「あれ？お前ら！」

ミリー

「もうきたの？」

ネル

「感動が薄れるッス……」

アリア

「まあいいじゃないですか」

「……………うわあ！？」「……………」

アリア

「ところで新しく、遠くの大陸で魔物が大量発生していて危険らしいんです

言ってこいといわれてるんですが

どうします？」

「……………もちろんいく！」「……………」

守

「よし！行くか！」

END

最終話 終わりと始まり(後書き)

はい！これで終わりです！

続編は……

気分で書きます

ではまた！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4125t/>

チートをこえたチート達

2011年8月16日09時31分発行